

豊橋市制施行100周年記念

校区のあゆみ

新川

豊橋校区史

20

Shinkawa







豊橋市制施行100周年記念

校区のあゆみ 新川



新川校区で一番古い木造建築 龍拈寺山門

大池通り

国道259号線をはさんで駅前大通りに続いているので、この辺りを駅前大通りであると思っている人も多い。遠くにレインボータワーが見えている。平成6年に電線類の地中化を行った。



札本通り

江戸時代には、東海道の街道筋であった。本陣2軒、脇本陣1軒、旅籠屋65軒、問屋場等がずらりと並んでいた。老舗の和菓子店がある。平成11年に電線類の地中化を行った。

魚町通り

魚市発祥の地。江戸時代には、安海熊野宮を中心に魚屋が軒を並べ、吉田の宿随一の繁華な通りであった。市内の魚関連の加工業者、魚屋の多くは魚町にゆかりある人々である。



た小路四、五丁目

戦後復興土地区画整理事業によって生まれた新しい道路ぞいにてきた商店街である。平成11年に電線類の地中化を行った。夜は、水銀灯とナトリウム灯のカクテル光線の街路灯がともしり明るい。



大手通り

かつてここを市電が走っていた。今は、すぐ東を通る国道259線を走っている。終戦直後この界限は、ヤミ市や大手マーケットで賑わった。平成12年に電線類の地中化を行った。

くすの木通り

平成4年に市からシンボルロード景観形成地区の指定を受けた。通りの中央分離帯に植えられた35本のクスノキの緑は、ここを通る人々の心にやすらぎを与える。平成10年に電線類の地中化を行った。



呉服通り

書籍の出版も行う老舗の本屋があったり、ギャラリーがあって文化の匂い漂う通りである。紳士服の仕立屋、ふとん店もあって町名の起こりを今に伝えている。平成10年に電線類の地中化を行った。

大手ビル商店街

牟呂用水の上に建てられたビル。魚町にあった大手マーケットが移転してきてできた商店街である。3階以上の階は、県営住宅となっている。ビルとビルの間には、橋があって、この下を川が流れていることを教えてくれる。



神明公園

戦後昭和25年6月に復興士地区画整理地内の公園として建設の決定を受け、造られた。整地作業は失業対策事業として行われた。第1回こども造形パラダイスは、この公園内で開かれた。平成10年にリニューアル。



聖蹟の碑

昭和天皇行幸記念の碑。向山台緑地の一角に建っている。ここからは、市街地が一望できる。

向弘苑

向山の台地が崖となった傾斜地にある。四国八十八か所巡りの石仏が静かに並んでいる。8月のお盆の万燈会は、美しく幻想的である。



発刊によせて



平成18年度
豊橋市総代会長

西 義 雄

このたび、豊橋市制施行100周年を記念し、「豊橋校区史～校区のあゆみ」を発刊する運びとなりました。皆様のご協力により記念事業に素晴らしい彩りを添えることができましたことを、心よりうれしく思います。

この事業は、100年の節目を契機に地域の歴史や文化、自然などを改めて見つめ直し、将来の夢に思いを馳せていただくものであり、51校区すべてが足並みを揃え発刊できたことに、たいへん大きな意義を感じています。また、各校区におきましては、編集委員を中心に多くの地域住民の皆さんが資料の収集や原稿の執筆などに携わられたことと思います。こうした取組みを通し、地域の絆がさらに深まったものと考えています。

地域イベントの開催を含め「市民が主役」を合言葉に行政と協働で進めてきた100周年記念事業ですが、多くの地域住民の方々が様々な形で挙って参加できたことが何よりの成果であったと思います。今後におきましても、この100周年記念事業を一過性のものに終わらせるのではなく、次の100年に繋げていかなければならないと考えています。

最後に、本校区史の発刊にあたり、多大なご協力を頂いた多くの皆様に改めてお礼を申し上げます、ごあいさつとさせていただきます。



平成18年度
新川校区総代会長

小 林 信 昭

豊橋市制100周年を迎え、「新川校区のあゆみ」を発刊できますことを、大変嬉しく思います。

この刊行に際しましては、直接執筆や編集に携わってくださった編集委員の方々はもとより、町総代、各種団体長さんをはじめとして校区内の多くの方々にご協力をいただきました。お陰をもちまして、ここに新川校区の過去数百年間にわたるあゆみの概略をまとめることができました。心よりお礼申し上げます。

豊橋市は、吉田の城下町、宿場町として発展してきました。私たちの校区は、その中心部の優位な位置を生かし、商業活動、地場産業の基を培い、今日の豊橋市の発展に寄与してきました。創業以来100年以上の老舗、校区外へと大きく事業展開していった企業も数多くあります。また、校区から輩出した著名人も、政治家、実業家、社会活動家、歌手、冒険家等多数おります。

このような新川校区の過去に誇りをもち、先人が残してくれた歴史や文化をしっかりと受けとめて、校区の新しい歴史を創っていくことが、今を生きる私たちの使命であると思います。今後の校区の発展を願って発刊によせることばといたします。

目次

CONTENTS

第1章 自然と環境

- 1 校区の位置と自然 7
 - (1) 校区の位置 7
 - (2) 土地のようす 7
 - (3) 気候のようす 7
 - (4) 交通のようす 8

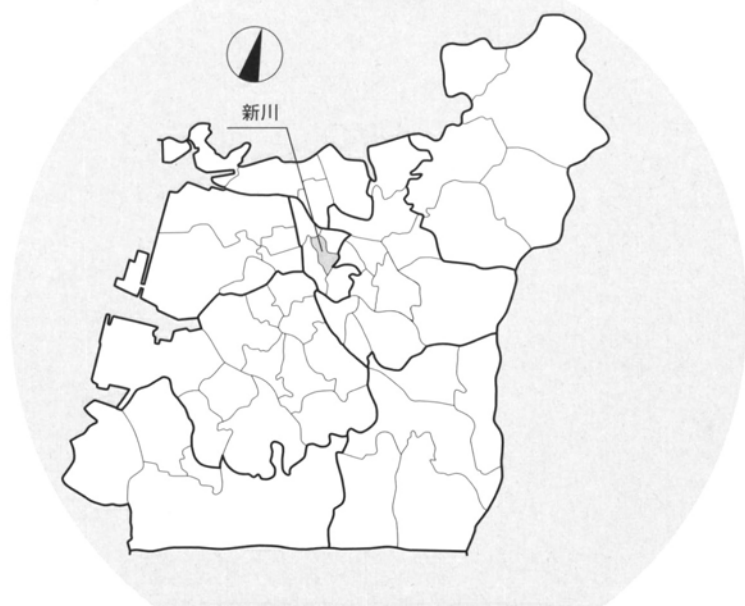
第2章 歴史と生活

- 1 あゆみ 9
 - (1) 明治以前の校区 9
 - (2) 明治期の校区 10
 - (3) 大正期の校区 12
 - (4) 昭和初期から終戦までの校区 14
 - (5) 終戦そして戦災復興へ 16
 - (6) 戦災復興から高度経済成長時代へ 18
 - (7) 昭和から平成へ 21
 - (8) そして100年後の新川校区は 23
- 2 校区の産業 25
- 3 校区の活動（2005年度の活動） 26
 - (1) 校区大運動会 26
 - (2) 新川夏祭り 26
 - (3) 市民館活動 27
 - (4) 交通安全活動 27
 - (5) 青少年健全育成活動 28
 - (6) 防犯活動 28
 - (7) 防災訓練 28
 - (8) 530運動 29
 - (9) 敬老会・成人式 29

第3章 教育と文化

- 1 学校教育・保育 31
 - (1) 新川小学校のあゆみ 31
 - ・新川小学校の誕生 31
 - ・豊橋市の誕生 31
 - ・校章決まる 31
 - ・スポーツ黄金時代 32
 - ・戦時下の教育 33
 - ・豊橋大空襲と臨時新川病院 34
 - ・生まれ変わる新川小学校 35
 - ・向山小学校の分離・独立 35
 - ・新川小学校健康教育への道 35
 - ・平成の新校舎 37
 - (2) 現在の新川小学校 38
 - (3) 保育園と幼稚園 40
 - (4) 中学校 41
 - (5) 昔あった保育園と学校 42
 - 2 史跡、文化財、祭り 43
 - 3 人物、今昔ばなし 48
- 編集後記 52

校区の位置



第1章 自然と環境

1 校区の位置と自然

(1) 校区の位置

新川校区は豊橋市の中心地にあり、向山校区、八町校区、旭校区、松山校区、松葉校区に接している。また、豊橋市役所、豊橋公会堂、豊橋公園、向山公園、豊橋駅にも近く、生活するのに大変便利な位置にある。

校区の中央を流れる牟呂用水を境に、おおよそ東部は住宅地域、西部は商業地域に区別することができる。

(2) 土地のようす

地形的に見ると、札木町、呉服町、魚町、大手町、神明町、新吉町は、豊川左岸下位段丘にあり、江戸時代にはほぼ吉田宿の中心に位置し、現在は商業地域となっている。その他の町は、柳生川流域低地で、江戸時代には中世古の村落をのぞきほとんど田圃であった。現在は、町工場、商店、事業所等が混在する住宅地となっている。平坦地であるが、東西から中央部へ、また、北から南へ向かって非常に緩やかに傾斜して低くなっている。小畷、前田中町辺りが校区内で最も低い土地となっている。この低い部分がかつては、水田であり、ところどころに池があった。現新川小学校の東側にあった池は「金魚池」と呼ばれ、金魚の養殖が行われていた。また、小畷町南東の角の池では食用蛙の養殖が行われていた。

初夏には蛍が飛び交い、蛙の鳴き声が聞かれるのどかな田園風景の地であった。

(3) 気候のようす

太平洋の暖流と、東と北を走る山地の影響により、比較的温和な気候である。しかし、冬季には北西の季節風「三河の空っ風」が吹き、寒さを感じる。

平成12年から16年の5ヵ年間の平均（豊橋中消防署調べ）で、最高と最低の月を見ると次のようである。

区 分	最 高	最 低
気温 (度)	8月 27.7	1月 5.8
雨量 (mm)	9月 231.0	12月 33.8
湿度 (%)	7月 78.3	3月 61.6
風速 (m)	1月 4.4	7月・8月 2.5

豊橋中消防署調べ（数値は、その月の平均値）

特筆すべきことは平成11年9月24日に竜巻が校区内を通過したことである。

午前11時5分頃、野依町付近で発生した竜巻は市街地に大きな被害を与えながら、時速約45kmで北北東に進み、約19km先の宝飯郡一宮町長山まで達した。

新川校区では、午前11時20分頃、中部中学校が直撃を受けた。窓ガラスが多数割れて飛び散り、その破片で大勢の生徒・教職員が怪我をした。切傷を受けた生徒200人、教師5人、内病院で治療を受けた生徒は28人であった。

豊橋の南部地域は竜巻が発生しやすい地形であるといわれている。発生した竜巻は北上して市の中心部を通過することが多い。

(4) 交通のようす

新川校区は道路交通の要の位置にある。東京・大阪を結ぶ国道1号線、豊橋を起点に奥三河・信州地方に通じる国道151号線、蒲郡方面に通じる国道23号線、また、渥美半島に通じる国道259号線等に接し、また、それらの主要道からの至近距離に位置している。

また、校区内を市電が通り、豊橋駅にも近いので、公共交通機関の利用も容易で便利である。



竜巻に襲われた中部中の教室



第2章 歴史と生活

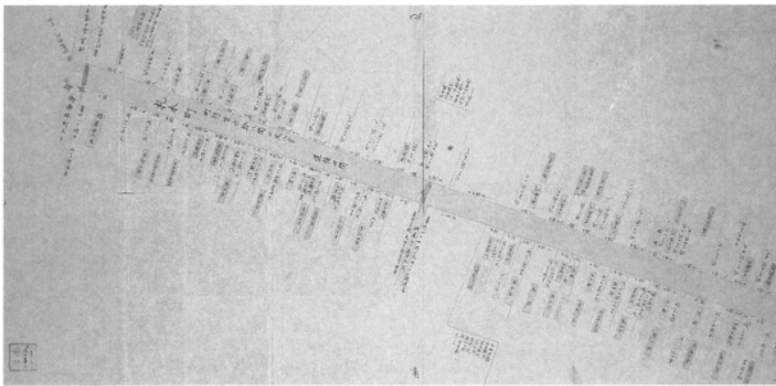
1 あゆみ

(1) 明治以前の校区

今日の豊橋の基は、今橋城の築城（1505）にあるといわれる。その中であって城下町、宿場町の形成を担ったのが、新川校区である。吉田宿には、表町12町（うち校区は、札木町・呉服町）と裏町12町（うち校区は、魚町・利町・紺屋町・元鍛冶町・手間町・世古町）があり、吉田24町といわれた。なかでも、札木町は城下町吉田の中心街であった。本陣、脇本陣、問屋場など宿場の重要な機能が集中

し、旅籠屋の大部分もここ札木町にあった。

魚町は家屋、人口の面で吉田最大の町であった。魚市場が安海熊野権現社の境内に設けられた。遠州灘一帯の魚は、魚町内の魚問屋以外で売買することが禁止されていた。このような領主の保護もあって、魚町はますます繁栄した。享和2年（1802）の記録によると、吉田宿には魚問屋13軒、魚仲買58軒、肴屋9軒があったが、そのうち魚問屋のすべてと魚仲買の大半は魚町にあった。



吉田宿東海道筋町別地図（札木町）



戦前の魚町魚市場



三河国名所図絵（魚市）

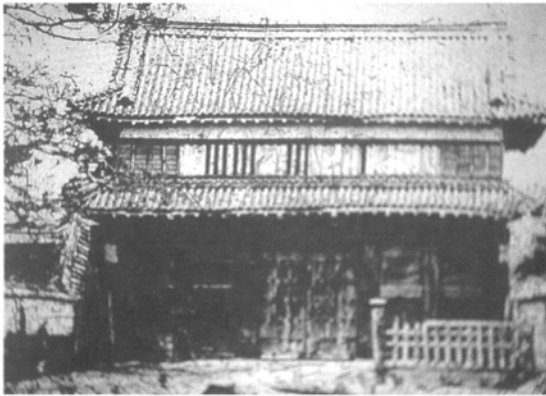


三河国吉田名蹤綜録（魚町魚市）

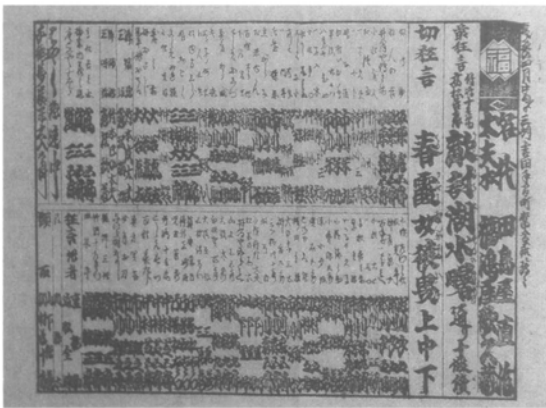
江戸時代の呉服町は、札木町から吉田城大手門の通り、高札場のある四つ辻の東に続く表町で、寛延3年(1750)の「吉田24町差出帳」によれば、戸数40軒、人口256人、内訳(男134人、女122人)伝馬役割り当て33軒で、馬9.5匹、歩行人足役8軒で8人となっており、藩お抱えの御用商人が軒を並べていた。

正保元年(1644)小笠原家の前の藩主水野忠善のとき、大手門右端から呉服町角まで「御馳走屋敷」後の「対客所」が設けられ、左の札木町側に6頭分の馬繋ぎ所、腰掛け、雪隠などが設けられた。これは参勤交代の為東海道を上り下りする諸大名への接待の場所であった。しかし、これらの建物は残念ながら明治7年に取り壊されてしまった。

吉田城の大手門(追手門)は牧野古白築城以来戸田氏の仁連木城を睨んで飽海口にあったが、池田輝政の城地拡張のときに、外堀の

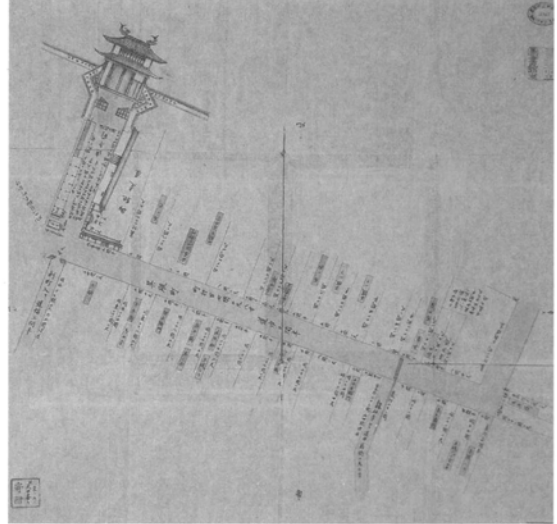


吉田城大手門



演芸場(東雲座)プログラム

札木、呉服町に接する所に移転し、延宝元年(1673)に竣工した。



吉田宿東海道筋別地図(呉服町)

(2) 明治期の校区

徳川幕府の崩壊により新川校区も大きな影響を受けた。明治に入ると、札木町にあった問屋場は商家に、人馬御継所跡は「豊橋取締所」「豊橋警察所」「豊橋郵便電信局」、本陣清須屋は「愛知県支庁」「豊橋町役場」等、官庁の使用する場所となり二転三転した。

旅籠は「席貸業」「芸妓置屋」「料理屋」「旅館」「小売商」へと転廃業し、「札木廓」といわれる「廓街」になった。

呉服町には銀行、医院、薬屋、書籍商、呉服仕立業等が軒を並べた。また、明治33年、呉服町に庶民の娯楽場として演芸場「東雲座」が開設され、町に賑わいをあたえた。

魚町は明治以後も増々発展して、市場周辺に鮮魚卸商、海産物商、魚加工店、仲買人が軒を並べ、威勢のよい「せり声」や、勇み肌の若い衆の熱気はまさに豊橋一であった。

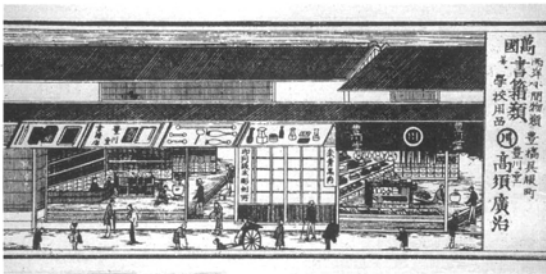
明治7年、魚町の商人小久保彦十郎等は、旧藩主大河内子爵家から能面及び装束を譲り受けた。その後明治17年能楽殿が新築され、町民の間で能狂言が盛んになった。若き大口

喜六氏（初代豊橋市長）神野三郎氏（商業会議所会頭）なども参加し、大反響を呼んだ。

明治維新で消滅した吉田の町火消しは、明治15年に私設消防組として五組が復活した。その中心的な役割を担ったのが魚町、清水町の消防組「魚組」であった。



魚組消防団



呉服町通り商店街



魚町、札木通り商店街



東雲座

明治期の大手通り 明治43年6月5日付の豊橋地方新聞「新朝報」の「豊橋の夜店」という記載記事を読むと、大手通りの当時のようすが伺える。

「大手通りは又、賑やかいなかに新緑滴る青柳がダラリと地上低く垂れているので心持のよいこと、このうえない。さすが夜店の本場だけあって、短い町の両側に幾十と一寸数えきれぬほどの露店がズラリ並んでいる。主なるものは、氷店、植木屋、青物、香具師、飴屋、活動写真、覗きなどで却々の賑わいだ。招く柳の下、煌々と輝く灯火も華やかなものである。」

明治期の札木町の庶民生活 「昔の札木では夕方になると、どこの家でも表の涼み台にゴザを敷いて、そこで食事をとりました。蚊が多いので縁台の下でベポーの木などをいぶしました。お互いに隣の縁台に向かって挨拶をするわけでもなく、思い思いの夕食でした。

向こう側とこちらの台の距離は、三尺くらい空いているだけで、のぞけば隣りのおひつの中まで丸見えといった格好です。もちろん今日のように人通りもなく、ことに夕食時は人通りはパッタリと絶えていました。飯が終わると行燈を縁台にのせて、碁、将棋が始まり、おそくまで楽しむわけですが、のんきと言えば、ずいぶんのんきな時代でした。

札木通りも、昔は暗い町でした。冬などは人見障子の一本だけに中の行燈の灯が黄色く映じて、まったく時代劇に出てくるような淋しい夜景でした。しまつな家では燈心一すじに灯をともしているだけですから暗いわけです。どこの家でも入り口には「ぶら提灯」があって、外出にはそれを提げて歩かないと、足元が危なかったんですから、当時の夜がどんなものだったか想像できるでしょう。」

(3) 大正期の校区

大正3年、第一次世界大戦が起こり、日本国内は大戦景気を迎え、物価が激しく上昇した。そのあおりで米価が高騰し、全国はもとより、新川校区内でも米騒動が起こった。大正7年8月、大手通りで数人の男達が米価暴騰について大演説を始め、その後大手通りや魚町の米屋に群衆が押しかけ、騒動が起こった。米価の高騰は市民生活を脅かしたが、大正9年頃になると物価も安定してきた。

大正12年、豊橋に都市計画法の適用が認められると、新川校区内でも道路の新設拡張工事が始まり、呉服、札木町の東海道、魚町通り、手間町通り、札木板新道通り、呉服裏通りの拡張工事が起こった。

「魚町道路拡張」余話 同町道路拡張工事は、着工大正10年、竣工大正15年であったが、工事費はほとんど自費で町内の頼母子講によるものであった。渋る人があれば同じ町民があくまで説得して遂行したのだ。そうして役所の手を借りることを一切やらない。年月はかかるがこれこそ本当の自治、民主主義だと町民達は誇らしげに思った。後、昭和になってから、浜松市から「私どものところでも道路を拡げたいが、豊橋の魚町がやったようなやり方で作りたいから教えてほしい」とやって来た。

「豊明館で活動写真」 大正元年、現神明町交番付近に「豊明館」ができた。無声映画が

上映され花形活動弁士が声色でセリフをつけ、弁舌で観客を泣かせたり、笑わせたりした。演芸場として、寿座（のち蝶春座）が清水町にでき、

新報朝報者割券
 豊明館
 年中休みの日
 開館日 正午十二時
 閉館日 午後七時
 活動写真 常設
 割券代用券
 本券 大人十銭
 特等券 大人七銭
 普通券 大人四銭
 小券 大人六銭
 小券 大人四銭

大衆娯楽場として校区内を一層賑やかにした。「謝近火御見舞御礼」 豊橋の市街地では人口密度が高く、家屋も長屋、間借りの人が多かった。道路も道幅が狭く、路地裏も多かった。各地の町内では、「火事」が最も恐れられていた。大正時代には、まだ上水道もなく、井戸に頼っていたからなおさらであった。新川校区は市内でも商店街や住宅が多く、火災も頻繁に起きた。火災が起きると、類焼して、町ごと火災に遭うのがほとんどであった。そんなときには、他地域から見舞物資が提供されるので、被災者町民一同は、新聞広告で「謝近火御見舞御礼」を申し上げていたのである。

大正8年1月17日、魚町の一商家より火災が発生し、またたく間に飛び火して、魚町、大手通り、紺屋町、手間町、呉服町、吉屋町へと延焼し、大災害をもたらした。

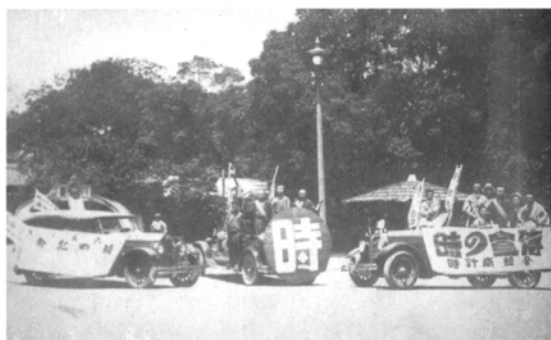
豊橋市魚町一丁目 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇
 豊橋市魚町二丁目 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇
 豊橋市魚町三丁目 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇
 豊橋市魚町四丁目 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇
 豊橋市魚町五丁目 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇
 豊橋市魚町六丁目 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇
 豊橋市魚町七丁目 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇
 豊橋市魚町八丁目 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇
 豊橋市魚町九丁目 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇
 豊橋市魚町十丁目 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇

大正8年1月17日新朝報に掲載された各町民の火事見舞御礼広告

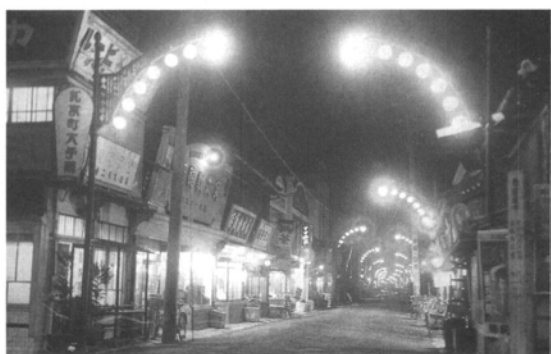
手間町に公設市場 大正10年6月、手間町「豊明館」裏に日用品小売第一市場として開かれた。その後、豊橋市内に5つの公設市場が設置された。指定販売品目には、青物、うどん、パン、鶏卵、味噌、溜、化粧品、傘、履物、炭、酒、砂糖、牛豚肉、小間物、菓子、雑穀、海産物などがあり、低価額であったため、大変賑わった。



6月10日 時の記念日 全国一斉に「時の記念日」が設けられた。大正9年6月10日より施行された。それまで時間を正確に守る習慣はなかった。大正15年、市役所屋上に時報器が取り付けられ、正午の時報を流した。時の記念日の啓発を率先して行ったのは、新川校区の時計商たちであった。



札木町の商店街にスズラン灯 大正15年、同町の納涼店飾りに豊橋で初めてスズラン灯が設けられ、豊橋一華やかな街並となった。それに加え、各商店が思い思いの意匠を凝らした「額看板」を掲げたので、札木の商店街はより一層、賑やかになった。



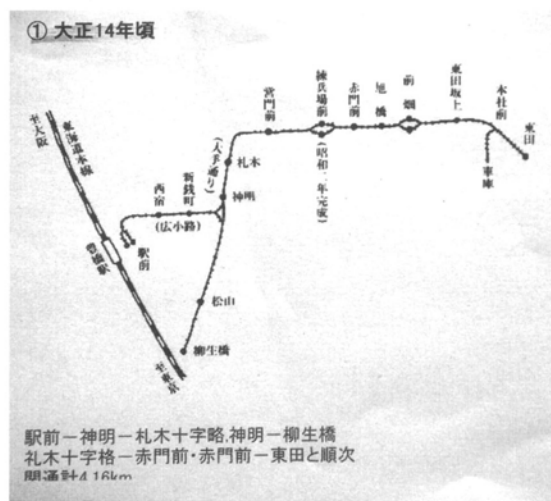
札木のスズラン灯

「大手通り、神明町に市電開通」 大正期に新川校区を一変したのが市電の開通であった。大正14年7月14日、祇園祭の当日、豊橋駅・豊明館前・大手通り札木十字路口で路面電車の営業運転が開始された。市民の路面電車の利用が多くなると、今までメイン通りであった札木、呉服町の東海道筋よりも、大手通り、新停車場通り（今の広小路通り）の方が賑わうようになった。各商店も市電通りに軒を並べるように集中しだした。

一方、大手通りで開かれていた「夜店」は、路面電車の通行が歩行者にとって危険なものになり、取り止めになった。



公会堂屋上から見た大手通り（昭和初期）



大正14年頃

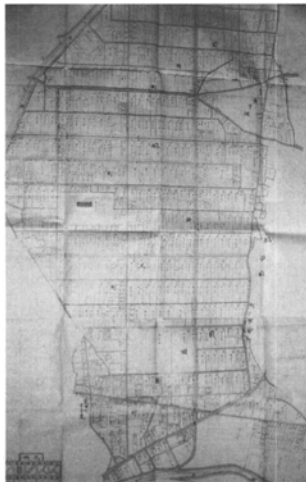
(4) 昭和初期から終戦までの校区

職業紹介所と八百間通り 昭和に入ると不況になり、失業者が溢れだした。そこで市役所は職業紹介所（今の職業安定所）を昭和7年、舟原町へ新築移転した。失業対策として失業者に下水道工事を請け負わせ、それに併せて「八百間通り」の道路を完成させた。

「省営バス（今のJRバス）」が走る 昭和8年豊橋―二川間のバス営業運転が開始され、新川校区を通ることになった。舟原、小畷町の停車場を経て八百間通りを通り、公設市場前（中世古町）に至る経路を走った。この停車場では、日用品雑貨の積み降ろしもしていて、新しい「市民の足」は利用客で賑わっていた。

「前田中町」昭和8年に町名改正？ 大正期に「前田耕地整理組合」が実施した工事が完了した後、昭和8年に豊橋市会より町名改正の申請が出され、答申通り告示される運びであったが、再改正の上で施行された。

以下町名改正は次のとおりであった。



前田耕地整理組合第一区確定図

旧町名	市会改正町名	最終確定町名
東田町字舟原	→ 前田東町	→ 舟原町
中世古町字前田	→ 前田栄町	→ 前田町
東田町字小畷	→ 前田本町	→ 小畷町
中世古町字西ノ又	→ 前田中町	→ 西ノ又町
	前田中町 ←	(のち吉田町) ←

「昭和期戦前の呉服町界隈」 呉服町の東部には東雲座があり、近くの板新道には花柳街もあって、東海道の通りの店はいつも賑やかであった。店先では夜遅くまで縁台を出して、夕涼みを楽しんでいた。板新道の芸者さん達が東雲座に出入りし、町内近所の人々も観劇に向かっていた。常連客には、下駄番専用の出入り口があった。

板新道の芸者達は朝風呂を沸かして、お客を呼び込んでいたので、町内の男共は朝から入浴に出かけていたようだ。

近所の子供たちは、近くの「中村駄菓子屋」へ出入りし、女性たちは「後藤髪結屋」へ通っていたようだ。

近所の銭湯「大手湯」では、芸者さんのおしろい姿に目を奪われる人も多かった。

呉服町の一商家に、豊橋の三大美人の一人として「吉田小町」と呼ばれた娘さんがいた。軍人さん達がひと目見ようと、店に押しかけた。

町内付近の店は、まだ自動車が普及していない時代であったので、自転車と荷車で商品の運搬をしていた。

公会堂が建つ前の頃は、役所の横に公園があった。そこで子供達は松の木や桜の木に登って遊んだ。

電話局の前に小屋があった。幽霊が出るという噂がたち、子供達は皆、恐れていた。

大手通りに路面電車が走るようになると、子供達は乗りたがり、近くの丸物百貨店や駅前まで、わざわざ電車に乗って出かけ楽しんだ。

大手通り沿いに「花井軍服店」があった。その店に、出征前の横井庄一さんが勤めていたそうである。横井さんは、戦争終結後も長い間、ジャングル生活を送った後、昭和47年に生還した。

「建物疎開」 戦時体制下になると、新川校区でも人々の生活が一変した。県の要請により、昭和18年疎開実施要綱が發布され、昭和20年5月下旬から、建物強制疎開が実施された。新川校区内では、現大手通りに沿って、その西側一帯、札木町から神明町にかけての約1万6千坪、423棟の建物が強制的に取り壊されることになった。そのため当該区域に位置する町民は、家屋もろとも立ち退きを強いられた。新川校区内には老舗も多く、目の前でなつかしい我が家を取り壊されるのを悲しんで、大黒柱に涙した人も多かった。

町内近所では餞別金を集め、ささやかな送別会を開き、互いに再会を約した。



昭和20年1月頃（建物疎開前の町並）
「中根平之助氏（魚町・中平商店）作成」



「建物疎開前の魚町弘文堂」

「空襲と牟呂用水」 昭和20年6月20日の豊橋空襲により、新川校区も、市街地のほとんどが被災した。空襲警報が鳴ると、呉服、魚町の住民は、近くの公会堂や豊川沿岸にある芋畑に隠れた。新川牟呂用水は当時きれいな水で、近くのおばさんたちが、用水路の石段を下りて洗濯をしたり、児童が泳いだりしていた。しかし空襲の時には、逃げ場をなくした人達が飛び込み、川の水を頭からかぶって、両側から襲ってくる炎を避けていた。しかし、川の水も次第に熱くなり、出れば焔、入っていても熱湯の川で、むなしく死んでいったそうである。



（呉服町・倉橋源治氏宅の駐車場地下には今も防空壕が残っている）

(5) 終戦そして戦災復興へ

昭和20年6月20日未明、豊橋は、焼夷弾による集中攻撃を受け、市街地は破壊され、全戸の70%を焼失した。

市内の中心部に位置する新川校区も、5月に実施された建物の強制疎開の効果も空しく、牟呂用水沿いの前田町の一部と舟原町を除いて、ほとんどの家屋は焼失し、多数の死傷者を出した。

市民は、焼け跡でのバラックや防空壕生活等の窮乏生活を送る間もなく、8月15日の終戦を迎えることになった。

戦災復興事業はじまる 豊橋市は、昭和20年末には、新豊橋の街づくりの基本構想を立案し、直ちに戦災復興事業にとりかかった。

市は、基本構想に基づき、被災地区130万坪のうち、既土地区画整理地区を除く114万3100坪を復興土地区画整理区域に指定し、昭和25年までの5か年事業とした。このため、新川校区の牟呂用水以南の地区は、次の昭和30年以降の区画整理を待つことになった。

復興事業の手始めは、焼け跡の残骸、瓦礫の除去、清掃であった。市はこの事業をわずかな謝礼やタバコ等の現物支給で各町内会、青年団に依頼した。各町内会もよくこれに応え、札木町、魚町、神明町などが積極的に参加した。これらの瓦礫は、主に、吉田城の空濠や板新道、神明町のロータリー、豊橋公園内等に埋められた。

復興事業は、駅前から順次進められたため、札木町、魚町、神明町あたりは比較的早く、昭和22年頃までには新しい街路網が完成し、また、昭和24年頃までには、呉服町、大手町、新吉町、中世古町までほぼ完了した。これにより、江戸時代以降自然発生的にできた無統制で曲がりくねった狭い街並は、完全に姿を消すことになった。

市民市場（ヤミ市）の出現 終戦間もなく、豊橋駅前には、自然発生的に露天の屋台が出現した。これに、日用雑貨を商う人や飲食店が加わり、ヤミ市が形成された。一般市民も、配給による食料、物資の不足を補うためヤミ市を利用せざるをえなかった。また、ここには名古屋方面からの買出し人も集まった。

昭和20年12月末には、この駅前のヤミ市も、駅前整備と治安のため、駅前大通の両側空き地と戦時中の建物疎開によってできた神明町の空き地の2か所に移転させられた。

駅前大通のヤミ市は、飲食店、甘諸飴原料の菓子店が多く、一方神明町のヤミ市は、一般市民の食料、生活必需品中心の店が多かったため、市民市場と呼ばれた。その後、神明町の市民市場の北側に、海外からの引き揚げ者による大手マーケットもできて、150店が軒を並べた。



大手マーケット

市民市場の移転と龍拈寺商店街の発足 昭和24年になると、道路整備も終わり、次に公園整備に取りかかるため、市は、公園予定地の神明ヤミ市業者に対し、8月31日までに立ち退くよう要求した。

市の斡旋により、約50店が、昭和25年6月までに龍拈寺境内に移転し、龍拈寺浅草観音商店街として再出発した。一方残りの約60店は、駅前の狭間小学校跡地に大豊百貨店を建て、12月にそこへ移転した。

龍拈寺商店街は、発足記念として、観音堂の建立を提案し、浅草観音の出開帳を企画した。この企画は、市当局、商工会議所を巻き込んだ全市的なイベントとになった。

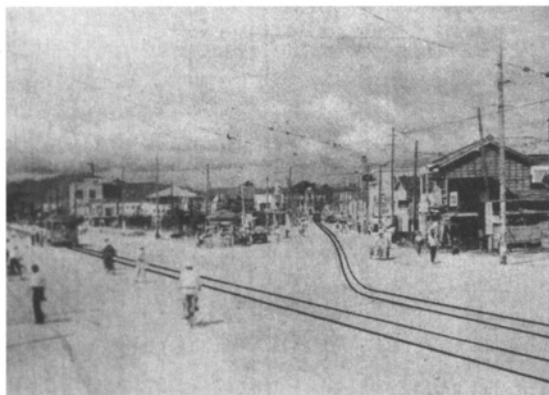
そして、昭和26年11月1日から約1週間、駅前から広小路通り、龍拈寺商店街にかけて、法要、供養の行列、大物産展等が催され、市内は大変な賑わいとなった。

神明公園の完成と市電の移設 ヤミ市の移転によって、昭和25年暮、市はやっと神明公園建設にとりかかることができた。

面積626坪、事業費116万円で、昭和26年3月に完成した。周囲に樹木を植栽し、噴水池を中心に、児童遊具、トイレなどを設置した。地元からは、平和を願って「平和の女神像」と小鳥小屋、植栽が寄付された。

この公園は、噴水のある公園として愛され市民のいこいの場となった。その後、平成10年に、地元の有志と市の共同設計によるユニークで洒落た公園に生まれ変わった。

市電の大手通りから新大手通り（国道259号線）への移設工事は、昭和22年から始まった。昭和25年7月、まず片側下り線の架線を完了した。翌26年10月末には上り線も完成した。この間上り線は旧大手通線をそのまま使用したが、新大手通線の複線化の完了と共に11月9日に撤去された。



市電線路・軌道移設（向かって右は旧）

学制改革—新しい教育制度始まる 戦後の改革の中で、市民に大きな影響を与えたものとして、教育制度の改革がある。戦争の反省の上に立って、二度と戦争を起こさない平和主義、民主主義に基づく教育制度が、昭和22年4月1日に発足した。男女共学、6・3制小中学校9年間の義務教育制度が始まり、市内では、国民学校から小学校へ、また、新たに10の新制中学校が誕生した。

新川校区では、新川小学校と新制中学校として中部中学校が発足した。中部中学校は、焼けずに残っていた旧制高等小学校の校舎をそのまま使った。教育内容の変更による戸惑いや教科書、文具類の不足による不自由さはあったが、校区内の小中学生は比較的恵まれた環境の中で勉強することができた。

児童の健全育成—子供会活動を中心に 戦後の混乱期、生活環境の悪化、ヤミ市、孤児問題等子供達を取り巻く環境は、大変悪かった。

昭和23年1月、児童福祉法が施行され、市からの要請もあって、新川校区でも6月16日西舟原町子供会、7月28日神明町子供会、8月1日前田西町子供会などが発足した。当時の子供会の指導は、主に青年団が当たっていた。また、地元紙の東三新聞（現東日新聞）も、12月に、「第1回子供会野球を楽しむ大会」を開催し、子供会活動をバックアップした。

昭和26年5月5日豊橋市子供会連絡協議会が設立されたが、この協議会の中心メンバーの一人が、「子供会野球を楽しむ大会」を提唱した神明町の野口品二であった。彼は、初代会長に就任し、以降、昭和40年まで会長職にあって豊橋市の子供会活動を育て発展させた。

昭和25年7月には、札木町、神明町、手間町（現大手町）の子供会が中心となって、ボーイスカウト豊橋第一隊が組織された。また、昭和30年6月には、子供会のリーダーを養成

する目的もあって、豊橋市健民少年団が結成され、新川校区を含む市内11校区が参加した。

このように、当時、市内最大の子供数を抱える新川校区は、児童の健全育成活動で中心的な役割を果たした。

旧豊橋中学跡地の歓楽街建設反対運動 昭和25年、焼け跡のまま放置されていた中柴町の旧豊橋中学校跡地約1万坪に繁華街（歓楽街）を建設する計画が持ち上がった。この計画を知った地元の新川、松山校区の人々は、小学校の隣接地に歓楽街ができることは、教育上良くないとして、直ちに反対運動に立ち上がった。特に新川校区PTAは、反対運動の先頭に立った。昭和25年11月27日には、新川小学校講堂に、新川小PTA、中部中PTA、婦人会などの会員が集まって、歓楽街建設反対の新川校区民大会を開いた。その後、反対運動は大きな広がりを見せ、数万人の反対署名を市に提出した。市当局も、猛反対の世論の高まりの中で当初の繁華街建設計画を断念せざるを得なくなり、結局、跡地には、裁判所、検察庁などの諸官庁と黒福児童公園が建設されることになった。

戦災復興による換地と町名、地番変更 終戦直後から始まった戦災復興事業は、豊橋駅前から順次周辺部に向かって進められた。工事の進捗に従って次々と仮換地を行い、昭和29年には、駅西地区と下地地区を残してほぼ終了した。最後に、区画整理の総仕上げとしての町名、町界、地番の変更作業が残った。

市は、市民の意向を反映した町名、町界の変更ができるように、市議会議員の代表による町名、町界、地番整理特別委員会を設け、検討していくこととなった。この中で、以下の基本方針が打ち出された。⑦町割は、結合方式を原則とし、いずれか一方に長辺の形状とする。⑧町界は、河川、水路、道路を以って充て、その中心を境界とする。⑨丁目は、

4、5丁目～10丁目以下に止め、豊橋駅を起点とし、遠ざかるごとに丁目を進める。⑩町名は、従来の町名に準拠し、簡単を旨とし、由緒あるもの、親しみのあるもの、語調の良いものを選ぶ。⑪地番は、1箇町ごとに、各町の北西隅を起点とし、通番、右回り蛇行式とする。

昭和33年9月6日、これらの方針に従って、町名、地番の変更が行われ、告示された。

新川校区における町名の変更は、以下の通りである。

新町名	旧 町 名
札木町	札木町、魚町、本町の各一部
魚 町	魚町、清水町、紺屋町、札木町、本町、神明町、花園町、三浦町、新銭町の各一部
呉服町	呉服町、吉屋町、曲尺手町の各一部
新吉町	吉屋町、新川町字市南、中世古町字中世古、呉服町、曲尺手町の各一部
大手町	手間町、神明町、紺屋町、吉屋町、魚町、札木町、呉服町の各一部
神明町	手間町、神明町、新川町字市南の各一部
中世古町	吉屋町、談合町、曲尺手町、中世古町字中世古、字前田、鍛冶町の各一部

その結果、江戸時代又は明治時代から続いた由緒、伝統あるいくつかの町名が、旧街並とともに消えてしまうことになった。

(6) 戦災復興から高度経済成長時代へ

(昭和30年代～50年代)

繁華街、商業中心地の移動 焼け野原から出発した豊橋市の戦災復興事業は、市当局の先

見性ある復興計画と市民の献身的な協力、努力によって、大きな成功を収め、見事な近代都市に生まれ変わった。昭和28年には、全国優良復興都市として表彰を受け、昭和29年の産業文化大博覧会の成功、昭和30年の近隣町村の合併による20万都市誕生へと繋がって行くことになった。

しかし、この復興事業の結果、市の繁華街は、江戸時代、吉田宿の中心として栄え、明治以降も商業の中心地の地位を保ってきた旧東海道筋の呉服町、札木町、本町から豊橋駅前周辺に移ってしまった。

終戦直後こそ、旧繁華街の本町、札木町等の商店街は、いち早く商業活動を開始し、ネオンサインを設置するなど集客に努め、神明の市民市場、大手マーケット、魚町、花園商店街と一体となった商業活動を展開したが、18連隊の消滅や、丸物百貨店の駅前移転、ヤミ市跡地の大豊百貨店、新豊橋駅2階の豊栄百貨店の出現とこれに続く駅前での娯楽施設、飲食店の増加によって、商業活動の中心繁華街は、完全に駅前に移った。

向山小学校の誕生 明治、大正期の向山一帯は、畑や雑木林の中に人家が点在する程度で、人はあまり住んでいなかった。大正末期、耕地整理が行われ、製糸工場や養鶏場などが建ち始め、徐々に住む人も増えてきた。このころ、向山は新川校区に属していた。戦後、市街地で焼け出された人達が移住してきて、宅地化が進み、人口が急増した。また、戦後のベビーブームによって児童数が激増した新川小と旭小の過大校化解消のため、向山西町に向山小学校が新設されることになった。昭和32年、まず、小学1、2年生だけで、新川小学校分教場としてスタートした。昭和33年には、3、4年生まで受け入れ、昭和34年4月1日6年生までの全学年が揃ったところで、正式に向山小学校として独立した。

新川校区からは、向山西町、向山台町、向山町、向山大池町など（総代区域でいうと、第一向山町、向山町、東向山町）が、向山校区に編入された。この時、第二向山町は、悩んだ末、新川校区に留まることを決定し、現在に至っている。

高度経済成長時代始まる 戦争によって壊滅した日本の産業も、昭和30年代に入ってやっと戦前の生産力を超えて、発展期を迎えた。日本経済の発展と共に、一般市民の所得水準も上がり、貧しさから豊かさへと市民生活も徐々に変わりつつあった。生活様式も次第に変化し、テレビや電気洗濯機などの電化製品が、どんどん家庭内に入り込んできた。とりわけテレビは、昭和34年の皇太子ご成婚を機に爆発的に普及し、あっという間に庶民の娯楽の中心となった。この中で、力道山や長嶋茂雄のようなスーパーヒーローが現れた。また、アメリカの影響などによって、畳から椅子へ、米食からパン食へと生活スタイルが洋式化し始めたのもこの時期であった。

テレビの普及率は、豊橋市内で昭和33年当時、18世帯に1台であったが、昭和38年には、1.3世帯に1台にまで広まった。昭和39年に開かれた東京オリンピックは、カラーテレビ化を大幅に進めた。

牟呂用水の全面改修工事 新川校区を二分する形で流れている牟呂用水は、明治の中頃造られた。掘った土を盛って堰堤を作り、ところどころ側面を石垣で補強した簡易なものであったため、当初から漏水が激しく、しばしば、堰堤が決壊した。戦後、永い年月を経て老朽化も進んだため、改修工事が必要であった。昭和42年、豊川用水事業の一環として、愛知用水公団によって全区間三面コンクリート張りの本格的な全面改修工事が行われた。この改修工事によって牟呂用水は、土手の雑草も取り払われ、舗装された道路ともよくマ

ッチした近代的な都市景観に一変した。改修前の牟呂用水には、階段式の洗い場があって、そこは主婦たちの洗濯場として、大切な場所となっていた。それにも増して、当時の子供たちにとっては、ここは絶好のあそび場であった。夏には水遊びやメダカ掬いに興じ、水流が減って浅くなるとフナ、ドジョウ、ザリガニとりに熱中した。冬にはまた、水のない川底が格好のあそび場となった。しかし、この全面改修によって、洗濯場も子供たちのあそび場も、全てなくなってしまった。



牟呂用水の洗い場（昭和30年頃）

大手ビル誕生 昭和42年10月12日、前田橋から大手橋間約300mの牟呂用水路の上に、5棟の水上ビルが誕生した。この水上ビルは、札木町の大手マーケット商店街が移転のため建てたもので、当初、3階建を計画していたが、資金不足のため、県営住宅とセットの5階建に変更された。1、2階を商店街が使用し、3～5階を県営住宅（129戸）が使用するという全国でも珍しい複合ビルが誕生し、大手ビルと命名された。

昭和43年、移転してきた大手商店街の人達と県営住宅入居者によって、町総代区域としての手ビル町が誕生した。

前田向山土地区画整理事業 中心市街地の戦災復興事業の完了に続いて、昭和32年に向山地区、昭和34年から前田地区と、土地区画整理事業が市によって始められた。

新川校区では、舟原町と前田町1丁目、2丁目対象地として整理された。もともとこの地区は、大正の中頃、耕地整理によって農地として整理されたため、道路は農道で道幅が狭かった。この区画整理によって、前田橋で止まっていた駅前大通は、商業高校の坂を通過してユニー（現アピタ）前に抜け、北からの大池前的大通りと繋がった。また、八百間通りを含め、他の一般生活道路も車社会に対応できる広さに拡幅された。下水道は、昭和10年頃、すでに主要管は布設されていたが、一般家庭に接続する支線管は未整備だった。それで、この区画整理に併せて、下水道の全面整備も行われた。雨水は、柳生川へ、汚水は羽根井処理場で処理されることとなった。これで、当地区全体が下水道の恩恵を受けることができるようになり、トイレの水洗化も一挙に広がった。

昭和34年頃から始まった区画整理も昭和45年にはほぼ完了した。そして、昭和48年6月11日、換地処分が公告され、下記の通り町名の変更が行われた。

新町名	旧町名
舟原町	舟原町、前田町、西新町、東田町字舟原の各一部
前田町 1丁目	舟原町、前田町、吉田町、小畷町、中世古町字中世古、東田町字舟原、談合町の各一部、中世古町字前田の全部
前田町 2丁目	前田町、小畷町の各一部、向山町字下畑、字南下畑の全部

地域活動の発展 昭和30年代後半、やっと生活に余裕を持ち始めた人々は、自らの健康や地域に目を向けるようになった。

昭和38年新川校区では、体育委員が中心となって、夏休みにラジオ体操を始めた。続いて昭和43年には、歩け歩け運動、そして、昭和47年には町別対抗体育大会を開催。昭和50年には女子バレーボール大会が始まった。これらの企画は、すべて現在まで引き続いて行われており、校区民の健康増進や地域活動の発展に大きな役割を果たしている。

一方、昭和37年の老人福祉法の制定を機に各町ごとに順次、老人クラブが結成された。この中で、昭和42年に結成された吉田町万歩会会長の山西七郎は、昭和50年から10年間、豊橋市老人クラブ連合会の会長として活躍し、老人クラブ活動の発展のために尽力した。

この時期、校区の地域活動は、祭礼や子供会活動などとともに大きな広がりを見せ、現在へと受け継がれている。

(7) 昭和から平成へ

前田南土地区画整理事業始まる 吉田町、小畷町、前田南町、花田町字石田地区は、市の中心部に隣接した住宅、商業地域で、前田、向山地区同様、大正中期に既に耕地整理は行われていたが、その後、狭い道路に住宅が密集し、市の中心部に隣接した地域としては、最後に残された未整備地域であった。

昭和34年には、都市計画は策定されていたが、土地区画整理事業として正式に認可されたのは、昭和48年8月17日であった。

この整理事業は、地区内の都市計画道路前田豊川線、牟呂通、石田線の3路線を根幹として、土地利用計画に適合するよう区画道路を適所に配置し、公園の新設、上下水道、ガス等の地下埋設物の移転等、公共施設の整備改善を行い、宅地の規模の適正化と、健全な

市街地の造成を図ることを目的とした。

この事業は、昭和48年から始まり、昭和61年に終了する予定であったが、移転家屋が900戸を超え、また、昭和50年8月と昭和52年3月の2回にわたる仮換地の指定に際し、103件もの行政不服審査請求が出されるなどしたため、たびたび事業計画の変更が行われた。そのため最終的に、換地処分の公告が行われたのは、平成12年1月7日であった。

この間、市当局も、現ジャンボ公園内に仮設住宅を建てて、移転者の便宜を図ったり、地区内の体育館の敷地を減歩するなどして、事業の促進に努めたが、当初予定の2倍近い期間を要し、市の区画整理事業史上、最長期間を記録してしまった。

この整理事業は、実施主体豊橋市、対象面積50.31ha、権利者数963人、家屋移転944戸、減歩率17.33%で、事業費約161億円が投じられた。

換地による町名変更は、下記の通り。

新町名	旧町名
小畷町	小畷町の一部
前田中町	吉田町、小畷町の各一部
前田南町 1丁目	前田南町、小畷町、吉田町、 花田町字中野の各一部
前田南町 2丁目	前田南町、小畷町、 花田町字石田、字土亀、向山町 字川北、字七面、佐藤町字才ノ 神の各一部

校区のランドマーク、レインボータワー 平成2年、豊橋市は、都市景観整備の重点施策として、「緑と水に囲まれた美しい町づくり」を基本テーマとしたシンボルロードの整備計画を策定した。そして、豊橋駅から駅前大通を通り、前田橋交差点を經由して、くすの木

通りから豊橋公園に至る1,600mの区間を豊橋シンボルロードとして整備することを決定した。

このシンボルロードの要は、前田橋交差点であり、ここにランドマークとなるY字形の歩道橋と天に聳えるタワーと階段に併設された花の広場の3点を有機的に配置することにした。

この歩道橋は、「レインボータワー」と命名された。この名称は、通学路となっている新川小学校に依頼し、1年生～6年生まで73件の応募の中から、学校、PTA、町総代会が相談して決めた名前であり、橋名板も同校児童によって書かれたものである。

このようにして、レインボータワーは、新川校区のランドマークとして、大切にされている。

タワーは、地上30mのステンレス製で、4本の桁で構成されている。最も高い1本を市民に見立て、他の3本を豊橋の産業である農業、工業、商業とし、産業が市民を支え、市民と産業が力を結集し、未来に向かって調和して発展する様を表現したものである。夜には七色の光が空に向かって輝く。平成8年3月に完成した。



レインボータワー

みんなで作った神明公園、ジャンボ公園 平成7年、市民のニーズに合わなくなった神明公園の再整備を検討していた市に対し、まちづ

くりを考える市民グループから、地元住民が主体となった公園計画づくりに協力したいとの働きかけがあった。市は、初めての住民主導による公園計画づくりを市民が、楽しく参加できるように、ゲームをしながら、理想の公園をシミュレーションする「デザインゲーム」という手法を進めることにした。

神明公園のデザイン作りは、地元の大手町を中心に、周辺住民たち53名が参加して始まった。平成7年10月から平成8年1月にかけて、5回の会合が開かれた。参加者は、6、7人ずつ6チームに分かれ、それぞれが思いの公園のイメージを膨らませ、競いながら理想の公園デザインを作り上げていった。

そして、緑を大切にし、四季を通じて草木の楽しめる公園、明るいイメージの公園、水辺空間のある公園、寛げる公園、安心して利用できる公園をコンセプトに、草滑りのできる丘、水のせせらぎに噴水とライトアップされた時計塔のある公園がデザインされた。

このデザインをもとに、平成10年3月、神明公園は、リニューアルされた。地域住民がデザインした公園第1号の誕生であった。

平成12年、地元住民有志と人に優しいまちづくりアドバイザーグループが、小畷町にある通称ジャンボ公園を自分たちでデザインし、利用しやすい公園に作り替えたいと市当局に申し出た。ジャンボ公園の再整備を計画していた市は、神明、黒福公園に続く3番目の住民参加による公園づくりを試みることにした。

平成12年3月、小畷町、第二向山町の町役員が中心となって参加をよびかけたところ、67名の参加申込みを得た。5月から11月まで、月1回の割合で、7回の会合を開くこととし、意見の集約方法は、神明公園のときと同様、他人の意見を否定しない、みんなの合意で決めることを基本に、チームごとにデザインを競う「デザインゲーム」を採り入れた、ワー

クショップの手法で行われた。

5チームに分かれたデザインゲームには、途中夏休みに子供の2チームが加わり、「人、自然、ふれあい」をテーマに話し合った。



ジャンボ公園

ソフトボールなどの球技ができる広場、トイレを覆う巨大アスレチック遊具、犬猫侵入防止具で囲われた砂場、防災用貯水槽の地下埋設、ミスト式噴水とせせらぎ、そして、周囲270mのウォーキングロードと日陰用藤棚など、創意と工夫いっぱいの子どもたちが遊びたくなるような公園デザインとなった。

ジャンボ公園は、平成15年3月、ほぼデザインどおり、再整備された。

このような住民参加の公園づくりは、公園の利用度を高め、地域の人々に、自分たちの公園だという愛着心をいだけせ、引き続いて積極的に係わりようとする意識を芽生えさせた。また、このことが地域活動の活性化にも繋がっている。

このようにして造られた神明公園、ジャンボ公園には、地元住民による自主活動組織が作られ、定期的な清掃や、花の植え替え、水遣りなどが行われている。

(8) そして100年後の新川校区は

一人とのつながりを大切に
する心は
変わらない

今年、平成18年である。新川校区が誕生

して100年が過ぎた。

この間、私たちのくらしは、貧しさから豊かさへと変わってきた。家には、電気、ガス、水道が完備し、食生活でも、食べすぎが問題となり、衣生活もファッションを楽しむようになり、だれもがマイカーを持ち、海外旅行へも簡単に行けるようになった。平均寿命も50歳から80歳に延びた。

それでは、これから100年後、私たちのくらしはどうなっているのだろうか。また、私たちの新川校区はどうなっているのだろうか。

明治以来、過去100年の間の激しい変わり様を見ると、とても想像がつかないが、こうして校区史をたどってみると、変わってないものもあることに気づく。それは、人のつながりを大切にし、自分たちの住んでいる地域、まちを良くしようとする気持ちである。この気持ちは、江戸時代あるいは、それ以前から自らの生活を守るため、生活の知恵として、自然に生まれたものかもしれないが、以後、時代の波に翻弄されながらも、脈々と受け継がれ、現在まで、私たちの暮らしの中や地域活動の中に生きている。

たとえ、100年後、私たちの暮らしや、校区の様子は、大きく変わっていても、人のつながりを大切に、地域を良くしていこうとする気持ちは、絶えることなく受け継がれ、そこには、すばらしいコミュニティー活動が展開されているのではないか。



四・九の朝市

町総代別人口と世帯数の移り変わり

町名	昭和35年		昭和40年		昭和45年		昭和50年		昭和55年		昭和60年		平成2年		平成7年		平成12年	
	人口	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数
新吉	1029	219	914	218	797	201	656	189	595	171	497	149	451	138	408	131	345	121
大手	641	128	590	121	567	123	503	132	501	144	444	127	415	132	390	142	366	148
神明	711	154	636	134	560	132	519	126	447	107	400	108	382	121	319	109	286	104
呉服	423	75	383	78	313	72	280	70	273	72	245	65	234	63	201	59	184	62
魚	795	153	681	137	598	126	466	114	401	123	346	104	310	110	259	99	230	94
札木	734	165	679	168	475	129	391	114	352	109	320	97	284	93	219	91	205	88
第二向山	1067	273	1080	301	1040	313	1013	326	926	316	844	293	782	282	670	250	591	236
小巖	610	137	1116	258	982	262	818	242	758	230	650	188	569	163	513	155	447	143
前田二丁目	352	74	313	69	257	62	408	128	374	123	327	110	304	107	260	104	304	107
前田一丁目	647	154	535	140	275	81	239	82	197	71	267	110	253	105	231	87	223	87
吉田	1701	385	1685	448	1515	449	1299	410	1047	363	989	376	1133	435	1121	432	1164	488
舟原	1070	247	991	238	877	231	757	211	799	226	653	202	687	237	696	264	661	266
前田	821	184	816	198	576	152	574	177	453	136	560	180	477	169	464	172	437	160
中世古	901	195	865	200	777	190	651	176	595	177	580	162	511	155	470	148	447	143
大手ビル					525	162	483	155	459	155	395	145	337	139	315	146	284	142
合計	11502	2543	11284	2708	10134	2685	9057	2652	8177	2523	7517	2416	7129	2449	6536	2389	6174	2389

データは、5年毎の国勢調査の数値(市役所行政課) 太字は最大値

2 校区の産業

(1) 農業

戦前、舟原、前田町、小畷町の一帯は大部分が水田であったことや中世古から向山にかけてのやや高いところで畑作が行われていたことはわかっている。また、終戦当時の校区内には、20軒ほどの農家が残っていたようである。しかし、これらの地域が農耕地としていつごろ開かれたかは、記録がなくはっきりしない。

戦後の戦災復興計画（都市計画）の〔土地利用計画〕で、舟原、小畷、前田町付近一帯は準工業地域に指定され、さらには、市街化区域となつて、この地域の農耕地は全て消え去った。

現在校区内で農業を営んでいるのは、中世古町の石河真一さんただ一人で、所有する農地も二川、賀茂、天伯、下地、沖野といずれも校区外の地である。

(2) 商業

新川校区の旧市街地に属する商店街は城下町、宿場町から発展してきた。

明治、大正、昭和の初期にかけての時代は日本が、近代的な工業を発展させ、農業中心の自給自足的な経済社会から、商品経済社会へと大きく変貌した時代であった。

第一次世界大戦後の物価高、昭和の大恐慌その後の百貨店の進出等、商店街にとって厳しい状況もあったが、市域の拡大、都市生活者の増加等の商業活動を発展させる要因の方が大きかった。このような状況の中、札木、魚町、呉服町等の中心市街地の商店街は発展してきた。

第二次世界大戦中の米軍による空襲によって、豊橋市の中心市街地の大半は全焼し、市街地の商店街も壊滅状態となった。

戦後の日本経済の復興はめざましく、豊橋の中心市街地の商店数も昭和30年代には戦前の規模をしのぐ勢いで増え続けた。

しかし、昭和の40年代になると大規模小売店が駅前大通りや広小路通りに進出、さらに昭和の終りごろから平成にかけて、大型小売店が郊外に展開するようになると、校区内でも、廃業する小売店が急激に増えた。

新川校区内の商店数の移り変わり

年 度	商店数	従事者数
昭和54年	635	2,543
昭和63年	373	1,761
平成3年	364	1,826
平成14年	245	1,270

数値は豊橋市商業統計より

(3) 工業

江戸時代—職人の住む町— 現在の大手町は、昭和33年9月の「戦災復興区画整理」により、それまでの手間町、元鍛冶町、利町、吉屋町、紺屋町、神明町、呉服町、魚町のそれぞれの一部を併せてできた。それらの町名は、江戸時代からずっとつづいてきた町名であった。手間町、元鍛冶町、利町、紺屋町、呉服町などの町名は、職人の住む町であったことを想像させる。

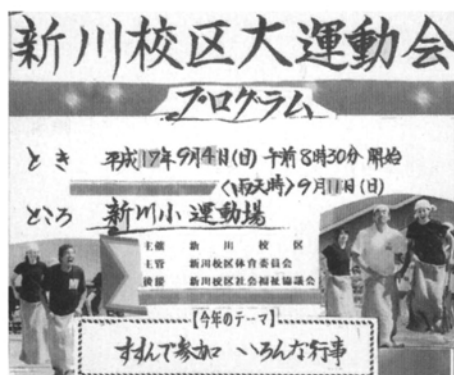
校区内の工業の現状 平成15年度の豊橋市の工業統計によれば現在、新川校区にある従業員4人以上の事業所数は24である。その内21が、従業員（4人～9人）の小規模事業所であり、残る3も（10人～19人）の規模である。従事者数で、市内における新川校区のシェアをみると、たったの0.5%に過ぎない。

現状の新川校区は、極めて零細な事業所が点在している地域であるといえる。

3 校区の活動（2005年度の活動）

(1) 校区大運動会

校区大運動会は、昭和47年から始まった。当初は、町別の得点制で、総合優勝の町を決めていた。昭和60年から、得点制を廃止し、若者だけでなく、子どもや高齢者も、楽しみながら参加できる種目を多く取り入れ、大勢の校区民がよるこんで参加できる運動会へと発展してきている。



新川校区大運動会プログラム



ポンポンを踊る小学生



頑張る綱引き

(2) 新川夏祭り

新川夏の陣は、子ども会の大きな行事（納涼まつり）として、平成8年に発足した。夏のひとときを小学校の中庭や校舎を使って、子どもたちが色々なゲームや遊び、おばけ屋敷などで楽しんでいた。

その後、参加者が多くなってきたので、校区民すべてが楽しめる会にしようと、平成15年から総代会が中心になり、各種団体の協力を得て、模擬店を増やしたり、手筒花火を取り入れ、新川夏祭りとして盛大に行っている。



模擬店の様子

平成15年からは、校区民の支援、協力を得て、新川神輿会の手筒花火演舞の後、打ち上げ花火を披露するようになった。



手筒花火打ち上げの様子

(3) 市民館活動

校区市民館は、地域住民の教養の向上、健康の増進、情操の向上を図り、また、生活文化の振興、社会福祉の増進に寄与することを目的として各校区ごとに建てられている。

新川校区市民館は、平成12年、市内49番目の校区市民館として建てられた。

そのつくりは鉄骨二階建てで、二階は小学校の体育館、一階部分が校区市民館で、集会室・研修室・和室・談話室などを備えている。研修室や談話室には、三河材を多用し、廊下やトイレは、車椅子でも困らないように広いスペースをとっている。学校開放型で学校の特別室も利用できるようになっている。

現在、地域住民が、各種団体の会合や、教養を高める場として活用している。

1年間の市民館利用状況

・各種会合の数	146回
・教養を高める活動回数	1,053回
・いきいき事業回数	59回
・図書貸出数	1,290冊
・来館者数	20,322人

新川小学校では、核家族化・少子化・そして、地域共同意識の希薄化などによって、年々家族と地域の教育力が低下してきている。

また、学校5日制が完全実施され、今まで以上に、子どもが健やかに育つ環境を整えることが必要となっている。

こうした中で、地域コミュニティー活動、社会教育活動推進の中心施設である校区市民館は、子どもを対象とした各種の講座や事業を地域のボランティアの協力を得て推進し、地域の教育力向上の一翼をになっている。

(4) 交通安全活動

豊橋市交通安全協議会の統計によると、1年を通して、交差点の事故、特に高齢者の死亡事故が多発していることがわかる。交通事故を少しでも減らすため、校区安全推進委員会は、以下の3つの柱を立て事故防止に努めている。

街頭指導の徹底 推進委員と町総代で、違法駐車追放パトロールなど、街頭指導を強化し、事故防止に努めている。



交通安全街頭指導のようす

外出時の安全確認の徹底 夕ぐれ時や夜間の交差点では、左右の安全を確認して横断することや高齢者が外出するときには、下記のことを必ず守るよう呼びかけている。

- | | |
|---------|-------------|
| ・外出する時は | 目立つ服装で出かける。 |
| | 反射材を身につける。 |
| | 左右の安全を確かめる。 |

交通安全教育の徹底 高齢者を対象に、体験・実践型の交通安全教室を開き、安全行動の体得をはかっている。

この3つを柱に活動を展開し、新川校区から、交通事故をなくすよう努めている。

(5) 青少年健全育成活動

家庭、学校、地域が一体となって、青少年の健全な育成をはかる活動である。この地区は、中部中学校区4小中学校が連携してこの活動を行っている。

年6回行うモニター会議では、各学校関係者が出席し、主任児童委員をまじえて地域の青少年の実態や問題点について話し合い、対策を検討している。また、小中学校生徒指導担当者と更正保護女性会が協力して、年間11回の校区内パトロールを実施している。

社会を明るくする運動 第55回社会を明るくする運動新川大会を校区民約80名の出席の下に開いた。豊橋ちぎりライオンズクラブの清水美和子会員が「子どもを薬物乱用から守るために」と題して講演し、薬物乱用は、健康に悪く、自分の意思ではやめられないこと。また、他人に害を与え犯罪を起こしてしまうなど、薬物の恐ろしさを訴えた。



ちぎりライオンズ清水会員

また、匹田保護司が中高生の非行の実態について「薬物乱用の補導数は少ないが、水面下では着実に増えているから、地域が一つになって立ち向かわなければならない。」と話された。

(6) 防犯活動

市内各地で、不審者による事件が増えている。手口はさまざまだが、児童・園児などの小さい子どもや高齢者をねらった犯罪が発生している。犯罪防止のために校区内パトロールを実施している。

パトロールは、15町内を5班に分け、年間25回実施。防犯支部長は腕章をつけ、新川校区市民館前をスタートし、自転車に「空き巣、車上ねらいにご注意…」など書いたステッカーをつけて、小畷町、前田町、中世古町、吉田町、神明町の各公園や魚町の繁華街などを回り、防犯を呼びかけている。



校区パトロール

◆地域安全活動（防犯活動）

- | | |
|-------------|--------------|
| ・校区パトロール | ・夏のパトロール |
| ・校区のお祭りの警備 | ・お寺の祭り警備 |
| ・夜店のパトロール | ・校区運動会の警備 |
| ・年末年始のパトロール | ・毎月15日のパトロール |

防犯支部長の地域パトロールは、地域の人たちとのふれあいを深め、安全で安心して暮らせる校区づくりに成果を上げている。

(7) 防災訓練

校区防災訓練 8月28日、校区民の防災意識を高めるため、校区民200名が参加し、次の訓練内容で実施した。

新川校区防災訓練内容

1. 人員報告 各町より参加人数の報告
2. あいさつ 校区防災会長・中消防署長
3. 訓練内容

時 間	実 施 内 容	
16:10	地震体験	A班・B班
	応急手当講習	B班・A班
16:50	消防団・女性防火クラブによる 放水及び救助資材の説明	
	全 員 参 加	
17:10	災害図上訓練（D I G）	
	各町10名程度（150名）参加	
	炊き出し訓練・無線による通信訓練	
19:00	終 了	



災害図上訓練

災害図上訓練では、町内毎に話し合うこと
によって、町内の危険箇所への認識が深まり、
災害発生時への対応力を高めることができた。
普通救命救急講習 昨年度は、一般町民・防
災指導員・女性防火クラブ員など40名が講習
を受けた。

本年度も約20名が講習を受けた。

(8) 530運動

豊橋市では、昭和50年に530運動を始めて、
30周年をむかえた。新川校区でも年2回全町
民が参加して、町内の美化につとめている。

中学生のクリーンアップ作戦 中学生たちは、
地域の人々の清掃している姿をみて、自分た
ちの校区から、ゴミやよごれをなくそうと、
公共の施設・歩道・牟呂用水路の清掃や、公
園の落書きを消して、美しい町にしようとが
んばっている。



牟呂用水路を清掃する中学生

小学生のボランティア活動 小学校高学年の
児童は、校区のジャンボ公園、吉田公園、神
明公園、札木電停やバス停の清掃などに進ん
で参加し、地域の人々と共に530活動を行っ
ている。



ジャンボ公園の清掃ボランティア

(9) 敬老会・成人式

敬老会 敬老の日は「多年にわたり、社会に
尽くしてきた老人を敬愛し長寿を祝う」とい
うことで制定された。

今から45年前、昭和35年の新川校区敬老会
参加者は、342名であった。

昭和35年9月4日

新川校区敬老会

会場 新川小学校講堂

主催 新川校区婦人会
協賛 新川校区総代会

森 佐村 鈴 鈴 岩 柴 河 加 天 中 河
藤 田 木 木 附 田 合 藤 野 西 合
義 利 芳 光 省 賢 田 徳 甚 道 興 陸
夫 雄 明 男 平 治 孝 郎 八 治 一 郎

豊橋市長
豊橋学区長

豊橋市市民信用組合
豊橋市民信用組合
豊橋相互銀行
豊橋信用金庫
豊橋信用金庫
豊橋魚市場
株式会社豊橋銀行
株式会社日本相互銀行
豊橋支店

東海銀行豊橋支店
東海銀行駅前支店
蒲郡信用金庫
東海銀行豊橋支店

本店・大手町
支店・小池支店
支店・二川支店
支店・東支店

祝敬老会

昭和35年の敬老会プログラム

その後、平均寿命がのび、70才以上の高齢者数が年々増えてきたため、会場の都合や交通事情から町内会毎に敬老会を行うようになった。



町内の敬老会

各町別老人会員数（平成17年度）

・新吉 102	・大手 75	・札木 47
・魚 60	・神明 68	・前田一 40
・前田二 49	・呉服 50	・第二向山 102
・前田 95	・舟原 112	・吉田 146
・小畷 57	・中世古 100	・大手ビル 52

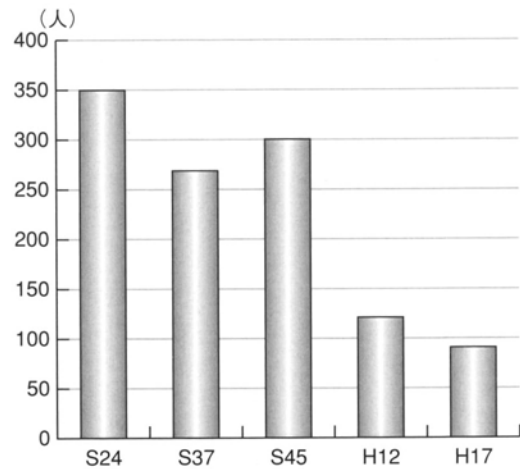
成人式の経過 昭和24年、第1回成人式が各校区で実施された。以来昭和36年までは、それぞれの地域で後継者の成長を祝ってきた。昭和37年、市の体育館が完成し、多人数が集まれる会場ができたので、全市合同で成人式を行ってきた。昭和45年、市体育館での成人式でトラブルが多発したため、以前に戻し、各校区で実施するようになった。



成人式の式場のようす

祝日法の改正より

- ・平成12年…「1月15日」から「1月の第二月曜日」が「成人の日」となる。
- ・平成16年…成人式は「成人の日」の前日の日曜日に実施する。

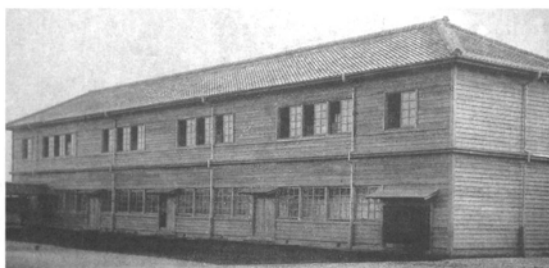


成人者の推移

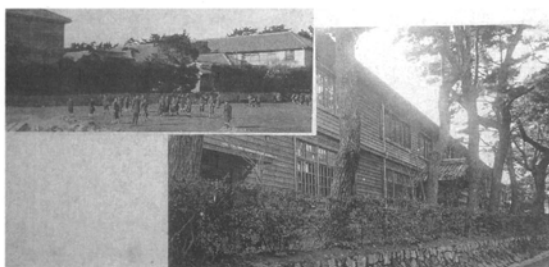
第3章 教育と文化

1 学校教育・保育

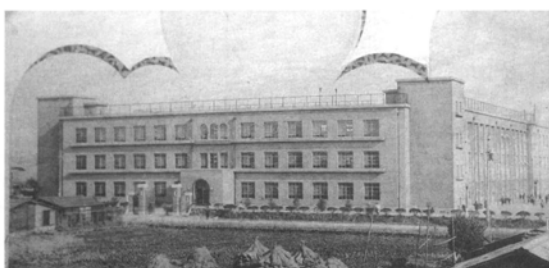
(1) 新川小学校のあゆみ 校舎のうつりかわり



大正6年頃



大正11年頃



昭和19年



昭和53年

明治、大正時代の龍拈寺前にあった校舎は、昭和6年に現在の地に新築移転した。



平成の新校舎 今も昔の正門が残る

新川小学校の誕生 明治34年4月龍拈寺前に豊橋南部尋常小学校新設。これが新川小学校の始まりである。

このころ国定教科書制度が成立し、国民教育の統一が強化された。また、日露戦争が起これ、軍事色が濃くなってきた。明治39年に市制を施行した豊橋市は生糸と軍隊の町として発展していく時期であった。

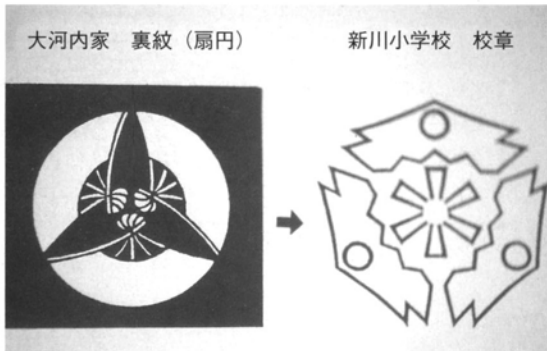
豊橋市の誕生 明治39年8月1日に豊橋市が誕生した。全国で62番目の市であった。それに伴い豊橋南部尋常小学校は同40年3月1日から豊橋市新川尋常小学校と改称した。



市制記念スタンプ

校章決まる 学校名が改称され校章も作られた。同校は前身が龍拈寺の吉屋学校であり、

龍拈寺は旧藩主松平伊豆守の菩提所であったので、松平氏の紋章「三ッ扇」を図案化して校章とした。つまり、旧藩主の菩提所が学校の地となったことにちなんで、その古い伝統をこの校章に残したというわけである。



校章

近代的校舎の落成、校歌 市制事業の1つとして区画整理が行われ、龍拈寺前の校舎が道路にかかった。児童の急増もあって、現在の地へ新築移転が決まり昭和6年8月に完成した。田んぼの中にそびえる鉄筋3階建ての校舎は、当時の人々を「あっ」と驚かせた。夏休みに子どもたちは、自分の机や腰掛を持って汗を流して運んだ。途中何度も休みながら、まるでアリの行列のように進んだ。

新川小学校 校歌

はなはらのれいさこはらの
とあかいのでいびんたつ
ゆかしさをしんがわの
よなびやこそはわがーぼこう

歌詞は4番まであるが、現在では時代の流れから、3番は歌っていない。古く南部小学校の伝統を受けつぎ、新川の歴史を作っていくという校歌はいつの時代にも声高らかに歌い継がれていくのである。

校歌の歌詞

高学年は、学校の備品なども運んだ。9月には新校舎で学習できることを誇りに思い、皆意気揚々としていた。

現在も歌われ続けている校歌は、昭和6年の校舎の新築移転を記念して、池田京平校長が、金田誠一氏に作詞を依頼し、飯田忠美氏の作曲、今井円治氏の編曲により完成した。歌詞は4番まであるが、現在では、時代に合わない3番は歌っていない。古く南部小学校の伝統を受け継ぎ、新川の歴史を作っていくという歌詞の校歌はいつの時代にも声高らかに歌い継がれていくであろう。

スポーツ黄金時代 大正時代から昭和初期は、野球、陸上の各種大会で大いに活躍した時代であった。大正9年にできた野球部は、熱心な指導者に恵まれ、昭和6年ごろまで全盛期が続いた。昭和3・4・5年連続、京都で行われた全国少年野球大会に出場し、よい成績をおさめた。以下は、当時の選手鈴木昌司氏の回顧録である。

「家に帰れば階段をはって上るほどくたくたになるまでしぼられたものです。打撃練習で運動場を超え、卒呂用水にボールが入ると、ほめられたものです。当時はめずらしい敬遠をして、次の打者で打ち取ったこともありました。プロ野球顔負けの練習を毎日暗くなるまで繰り返しました。懐かしい思い出です。」

先輩後輩のつながりを語る中村進午氏の回顧録は次のようである。

「新川小の卒業生は、青波会（豊橋中学）、星川会（女学校）などの会に参加しました。休みともなれば学校に来て野球の応援をしたり卓球をしたりしました。夏には関屋から石炭船に乗って江比間まで行き、自分たちで食事を作り生活を共にしました。冬には鳳来寺から湯谷まで夜間歩行をし、精神の鍛錬もしました。また、学芸会に賛助出演するなど新川のために陰に陽に応援したものです。先輩

後輩のつながりが、新川の伝統を創り上げていったのだと思います。」

女子の陸上も大変強かった。奈良で行われた日本女子オリンピックで走り幅跳び、60m走、リレーの3種目に優勝した。

戦争の影が徐々にしのびよっていた昭和6年、文部省より禁止条項の多い野球施行方法が公布され、同7年野球統制法により野球は、実質的に禁止となった。代わって登場してきたのが、すもうと剣道であった。

戦時下の教育「豊橋市新川国民学校」 昭和16年3月、文部省は小学校令を改正して国民学校令を公布し、国民学校を発足させた。同年12月に太平洋戦争が始まると、皇国民を育てる教育が強力に推進された。

明治以来70年間、国民から呼称されてきた小学校の名称は、国民学校に改められた。教科書の内容は、次のように軍国主義、国家主義的色彩が強められた。

「ヘイタイサン ススメ、ススメ
チテチテタタテテタテタ」
「日本ヨイ国、キヨイ国、
世界ニーツ神ノ国…」

豊橋市学務課長の提唱により、市内24国民学校それぞれに校名入りの校旗が作成された。その意図は、「国民学校教育が日本国民として重要な資質を創り上げる上にも、各校校風の高揚にも校旗は大切なものである。市内の



大喜びのよい子たち（昭和18年7月）

各国民学校が一丸となって皇道翼賛を目標に邁進する。」であった。この校旗は、現在も保管されている。

水難事故防止のため豊川での遊泳は禁止されていた。したがって、大多数の子どもたちは、牟呂用水の遊泳開放日を心待ちにしていた。牟呂用水沿いの新川の子どもたちは、7月23日から8月末日まで、午後1時から3時までの2時間、思い切り水遊びをしたり、魚とりを楽しんだりした。足にはヒルが吸い付いた。牟呂用水一帯の人たちには、正午から3時まで洗濯をやめてもらっていた。

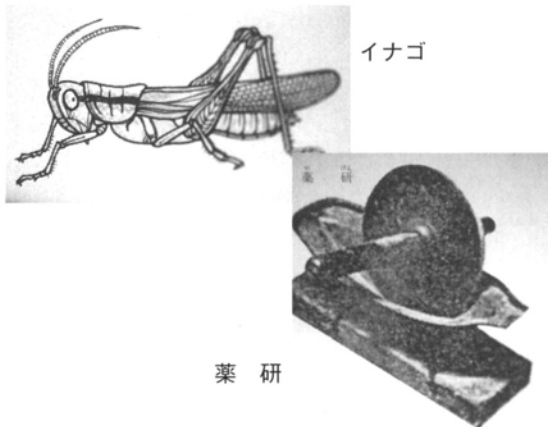
新川合唱部の声がNHKラジオから流れた。新川国民学校5・6年生の代表16名は、「虫の楽隊」「鳥居強右衛門勝商」の2曲を猛練習した。昭和17年9月30日、その美しい歌声は、NHKの電波を通して各家庭へ流れた。これは、当時の暗い世相にあっては明るいニュースであった。



新川合唱部

戦時中、学校へ持っていく弁当は、麦入りごはん、さつまいもやじゃがいもを蒸しただけのものもあった。白米は「銀めし」といい、これを持ってこられる者はごくわずかであった。中には家庭の事情で弁当を持ってこられず、昼食時そっと教室をぬけだし、水で空腹を満たしていた子もいたようである。食糧不足で日々ひもじい思いをしながら学校生活を送っている子どもたちに、少しでもタン

パク源を摂取させようと、全校あげて牟呂・牛川方面の田へイナゴを取りに出かけた。取ってきたイナゴは、学校の大きな釜でゆで、屋上にむしろを広げて天日乾燥させた。低学年を担当する職員は、子どもを帰宅させた後、乾燥したイナゴを粉にする仕事をした。薬屋から借りてきた「薬研」でイナゴを粉にした。粉にしたイナゴは味噌汁のだしにした。イナゴのだし汁の中には、さつまいもの葉柄が汁の具のかわりに入れてある。味の薄いイナゴ汁であった。イナゴは佃煮としても食べられた。また、さつまいもの蒸したのも主食とした。子どもたちはこのようなものでも大喜びで、いものすじまでもきれいに食べた。当時に比べると現在の給食は王侯貴族の食事といえるだろう。



戦争が長引くにつれて、国内では物資が極度に不足してきた。これは、生活用品よりも兵器の生産を優先したためである。そして国民は、政府の方針により決戦国民生活を余儀なくされた。その具体的な手立ては、次の間に合わせ5項目であった。

- ⑦衣類、家具等の新調や新規購入は見合わせ、あるもので間に合わせる。
- ⑧物は大事に使い、修繕や作りかえで工夫をする。
- ⑨電気、ガスは、割当て額で間に合わせる。
- ⑩みんなで玄米食を実行する。

④衣類その他のものは、融通交換をして互いに間に合わせを行い、買いだめ買いあさりをしてしない。

衣食の間に合わせは、学校生活でも同様であった。楽しい入学を心待ちにしている新一年生の中には、真新しい洋服や学用品など購入してもらえず、兄や姉、親類の子どものお古でがまんした子も大勢いた。当時の子どもたちは、いつも防空頭巾を肩に掛けて登校した。胸には、空襲のとき身元がわかるように町名、氏名、年齢、血液型を書き記した名札をつけていた。履物はわらぞうりや下駄であった。

豊橋大空襲と臨時新川病院 昭和19年11月7日B29が東京方面に初めて姿を見せてから、空襲が本格化してきた。翌20年6月18日には浜松・四日市が焼夷弾の攻撃を受け、翌日には豊橋が空襲を受けた。

その大空襲は次のようであった。

昭和20年6月19日午後11時40分頃、この日3回目の警戒警報が発令された。その20分後には空襲警報となり、その30分後には解除となった。空襲警報の解除にほっとした市民の耳元に、またしてもラジオから「敵機一機北上中」の放送が流れた。まもなく豊橋の上空にB29が約90機の編隊で飛来し、焼夷弾の雨を降らせた。2時間あまりの波状攻撃で市街地のほとんどが焼け野原となった。全戸数の70%が焼失、罹災人口は全人口の50%におよんだ。

新川国民学校も例外でなく、物置小屋やポンプ小屋が焼失。南校舎二階の工作室に焼夷弾が落ち、火災が発生した。しかし、当直の訓導や駐屯していた105部隊の人たちがすぐ消火にあたり、事なきを得た。

大空襲後10日を過ぎた6月29日、新川国民学校に収容されていた罹災者の中に赤痢患者が発生した。患者を市立豊橋病院と三ノ輪の

伝染病院へ隔離した。しかし、次々に発生する患者を病院では収容しきれなくなった。そこでやむをえず市当局は、患者が新川校区に集中していたこともあり、学校を収容施設にあてようとした。学校はもちろん反対したが、事後消毒を厳重に行うという約束で承諾した。可知義平太を院長とする臨時の新川病院には患者が多数収容された。

秋風が吹き始めた9月下旬頃には、発生件数も減少し、ようやく峠を越すことができた。市内の1,448名の患者のうち、385名もの人々が亡くなった。

学校が臨時休業のまま時が過ぎ、ようやく7月30日、前田保育園・舟原集会所・東向山集会所の3箇所に分散して授業が再開された。毎日のように空襲警報が出る中、机や教科書もなく鉛筆にも事欠きながら授業を行った。児童数は空襲前の4分の1に減っていた。昭和20年8月15日正午、天皇陛下の玉音放送で長かった戦争が終わった。新川国民学校は、当日、空襲警報のため授業を中止していた。10月25日、前田保育園、舟原集会所等で分散授業を受けていた児童たちは、なつかしい母校へ戻ってきた。しかし、それまで避病院となっていたため、すぐには授業が再開できず、連日清掃作業や環境整備が行われた。空襲中500人に満たなかった児童数は、11月には1,000人を超え、戦前の半数近くに戻った。少しずつ学校は落ち着きを取り戻してきた。

昭和21年10月21日、戦後の復興状況視察のため、天皇陛下が本市に行幸された。終戦後の混乱の中から立ち上がろうとする市民にとって“人間天皇”のお姿は励ましとなった。本校の児童、職員も広小路通りまで出迎えに行った。

生まれ変わる新川小学校 戦争で荒れ果てた国内は、物資の不足で学用品もなく、苦しい日々の連続であった。占領軍総司令部は、昭

和20年の秋から冬にかけて矢継ぎ早に教育上の諸改革に関する指令を出し、従来の軍国教育、極端な国家主義的な教育を一転させた。

そんな終戦直後の混迷のなか、新学制が定められた昭和22年からの5年間、新川小は愛知県教育委員会から新しい教育のあり方を研究する実験校の指定を受けた。この新教育開拓期ともいえる時期、教師たちは常に前向きの姿勢で新教育の研究に必死に取り組んだ。そして、その成果を新川プランとして発表した。

昭和27年からの3年間は、この新川プランの上にたった新教育の推進期であった。教師たちは、毎年自己の研究テーマを定め、年度末には各自研究発表するという現職教育強化のときであった。これらの時代を経て、30年度からは、日常の授業、学校行事、現職教育も安定し、継続性を持つようになった。教育安定期へと向かうのである。

向山小学校の分離・独立 昭和28年教室が不足し、一学級平均60名を超えた。31年には全校児童数が2,236名となり、戦後のピークを迎えた。同年、小学校が一つ新設されることが決定され、新川小学校分教場（向山台地）が発足。34年豊橋市立向山小学校として独立した。



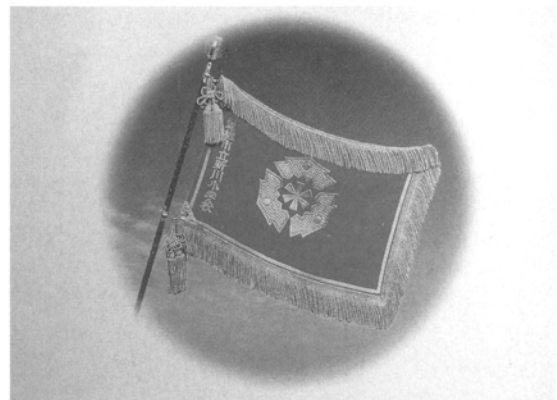
新川小学校健康教育への道 戦後10年を経て、高度成長政策、貿易自由化などが進められ、日本経済の急速な成長が始まった。

昭和31年度 新川小学校 学級編制								
学 年	1	2	3	4	5	6	計	
学級数	7	7	7	6	4	5	36	
い	男	28	33	32	32	34	34	193
	女	26	31	28	28	31	31	175
	計	54	64	60	60	65	65	368
ろ	男	35	32	31	30	34	33	195
	女	28	25	30	31	30	33	177
	計	63	57	61	61	64	66	372
は	男	34	32	33	32	33	33	197
	女	29	32	29	29	29	32	180
	計	63	64	62	61	62	65	377
に	男	34	34	32	31	34	33	198
	女	28	30	29	29	30	32	178
	計	62	64	61	60	64	65	376
ほ	男	32	34	31	31		34	162
	女	30	30	29	28		31	148
	計	62	64	60	59		65	310
と	男	34	35	32	31			132
	女	27	29	29	29			114
	計	61	64	61	60			246
り	男	33	33	32				98
	女	30	31	29				90
	計	63	64	61				188
計	男	230	232	223	187	135	167	1,175
	女	196	208	203	175	120	159	1,061
	計	426	440	426	362	255	326	2,236
平均	64	63	61	60	64	65	62	

新川小学校では30年代、健康教育への道を歩みだした。昭和31年度の体育研究指定の発表をかわきりに、情操教育、交通道德モデル校として児童の心にひびく活動を繰り広げていった。児童を取りまく環境を整備し、心身ともに健康な人間づくりをめざした教育を進め、昭和37年度には健康優良校「準愛知県一」、さらに昭和41年度には、「愛知県一」に輝いた。

アスファルト舗装されていた中庭は、照り返しが強く問題があった。昭和35年、芝生庭園に生まれ変わった。子どもたちにとって憩いの場となった。

昭和47年3月、新川小学校創立70周年記念式典と記念展覧会が行われた。全校児童の作品約900点、沿革を表す写真85枚、全国優勝を含めた野球・相撲・陸上などの優勝旗35本、多数の表彰状が3つの教室にわたって展示された。記念式典は、卒業生、PTA、来賓など1,000人余りの出席をみる盛大なものであった。記念式典に合わせて、新しく校旗が作られた。



新しい校旗

昭和46年8月にはプールが完成、竣工式が行われた。子どもたちは喜々として初泳ぎを楽しんだ。

昭和48年5月には銀白色に輝く地球儀が中庭に完成し、除幕式が行われた。地球儀は、「志を大きく持って、世界に雄飛しよう」の意をこめたものである。

校舎の屋上は、狭い運動場を補うため建築当時から屋上運動場として利用された。昭和58年から人工芝も設置された。

昭和61年9月、新川小学校創立85周年記念大運動会が行われた。また、創立以来の足跡



スクールアート

を「新川小学校85年の歩み」としてまとめた記念誌も発刊された。

平成9年10月、航空写真「スクールアート」が撮影された。中庭でみんなのアイドルである「アヒル」を表現した。

平成の新校舎 新校舎の建設は、長い間、校区民の願いであった。運動場を広くして子どもたちを思いっきり遊ばせたいということで、プールを屋上にもっていった。廊下とはいえないほど広いオープンスペースも設けられた。体育館屋根にはソーラーパネルが取り付けられ、電力の節約も考えられている。



現在の新川小、正門風景

運動場が使えない間、学校近くの広場を運動場にした。仮設運動場「えのき広場」は、平成10年5月に工事が始まり、7月に完成した。また、同年9月には、27年間使われたプールが取り壊された。

平成10年12月に新校舎が完成。翌年正門が新しくなり、早川市長が学校名を揮毫した。その後、新体育館には、ソーラーパネルが備え付けられた。

平成12年1月23日より、旧校舎の取り壊しが行われた。同年10月に、旧体育館の解体とともに運動場整備が始まった。2年半にわたる大工事を終えて、平成の新校舎が整った。



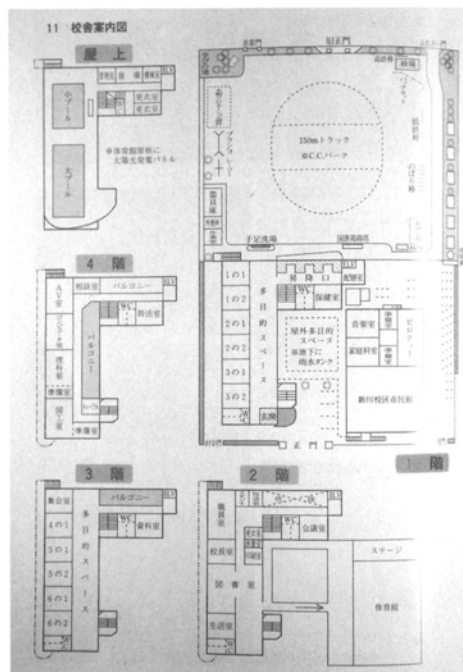
旧校舎



建設中



新校舎



校舎案内図

(2) 現在の新川小学校 (2005年度)

児童の数 多い時は2,331名(昭和19年)いた在籍児童数も、平成17年度(2005年度)は281名に減少した。全国的な少子化現象と人口減が著しい街中の学校であることから、今後増加の可能性は少ない。

出身幼稚園・保育園 全校で106名(38%)が校区にある豊橋中央幼稚園の出身である。次いで、31名(11%)が向山保育園出身であるが、転勤族といわれる保護者も多く、県外・市外を含め20以上の幼稚園・保育園を卒園している。

時間割 平成14年4月1日から施行された小学校学習指導要領で示された各教科の年間授業時数は、週何時間と割り切れない教科がある。そこで、基本となる時間割はあるが、行事や教科の実施時間数を考慮して、毎週それぞれの学級が時間割を出している。

【例】5年生の時間割

区分	17日	18日	19日	20日	21日
	月	火	水	木	金
	読書	計算	集会	読書	計算
1限	国語	体育	学活	国語	道徳
2限	社会	社会	算数	算数	体育
3限	理科	音楽	体育	家庭	音楽
4限	理科	国語	国語	家庭	国語
5限	算数	算数	図工	行事	総合
6限	総合	総合	委員会		算数

10月17日(月)～10月21日(金)

この週の行事は学校保健委員会、水曜日の6限は委員会とクラブを交互に実施している。3年生以上の総合的な学習の時間は、学校独自のカリキュラムで実施している。年間105時間～110時間(週平均3時間程度)があてられている。

特色ある教育活動

ときめき新川 様々な文化に触れさせ、学校生活を豊かな心でスタートさせようと、2・3学期の始業式の後に実施している。この年の2学期は井上亮子講師によるマリンバ演奏、3学期は大澤華香氏と華墨会員による書道についての講演と大書の実演を行った。

新川の技 6年間を通して一つのことを訓練し、体育の技量の向上を図ろうという試みが今年スタートした。その成果は、毎年、運動会で発表する。

二分の一人式 10歳になる4年生が、豊橋筆の伝統の技を学び、自分で作った筆で、自分の夢を書き初めて大きく書き、掛け軸にしている。それを掲げて保護者の前で夢や目標を述べる二分の一人式を毎年行っている。

食育 「食」の指導の充実を、学校保健委員会の課題とし、PTAと共に進めてきた。6月の委員会では、児童発表や栄養士の話、保護者アンケートの結果発表を行った。10月の委員会では、指導の実践と成果の確認をした。また、この年は、9月の「親子の集い」でも、全校で「食」に関する授業を公開した。

歯の健康指導 虫歯ゼロを目指して「歯の指導」に取り組んでいる。1～3年生がフッ素洗口を毎週火曜日に行っている。学校歯科医による研修会も持ち、授業でも歯の指導を取り入れた。

防犯・防災 平成16年度から、全校の児童が防災頭巾を常備し避難訓練で使っている。親子で「校区安全マップ」を作り、防災への意識を高めた。貸出用防犯ブザー、さすまたの常備、防犯パトロールをアピールする自転車用プレートを作成し保護者への配布、「こども110番の家」への広報等、校区やPTAと連携して、子どもたちの安全を守る体制作りをしている。

主な学校行事

- 4月 入学式
新入児交通教室
避難訓練
- 5月 遠足
運動会



- 6月 万博「愛・地球博」見学
学校開放日
第1回学校保健委員会
- 7月 個人懇談会
- 9月 ときめき新川
「マリンバ パワーアップ コンサート」



避難訓練



- 夏休み作品展
野外教育活動
親子の集い「新川小ミニ万博」
- 10月 修学旅行
トヨタ自動車工場見学
学校開放日
就学時健康診断
第2回学校保健委員会
- 11月 学習発表会



- 12月 マラソン大会
- 1月 ときめき新川
「大書を学ぶ」
- 2月 第3回学校保健委員会
- 3月 卒業証書授与式

児童会活動

- 1年生を迎える会 6年生を送る会
- ごきげん集会 感謝する会



- 縦割り活動
- 委員会活動

(3) 保育園と幼稚園

豊橋市立新吉保育園

所在地：440-0871 豊橋市新吉町1番地2

☎0532-52-2711

経営主体は豊橋市である。2005年度、園児数は75名、教職員数は26名でスタートした。

昭和46年に吉田塾を改め「豊橋市立新吉保育園」として設置された。

本園は、看護師さん等働きたい女性を支える市で唯一の乳児専門園である。0歳児は、生後4ヵ月から受け入れている。0、1、2歳児の3つのクラスだけの小さな保育園である。人間としての基礎をつくる大切な時期の子どもたちを、ていねいに心を込めて保育している。朝7時45分に登園、夕方16時に降園であるが、19時までの時間延長保育も行っている。1日の流れは次の通り。

- 7：45 登園・健康観察・あそび
- 9：30 おやつ・あそび（散歩・戸外あそび等）
- 11：00 昼食・休憩
- 12：00 排泄・着替え・昼寝
- 14：45 目覚め・着替え
- 15：00 おやつ
- 16：00 順次降園・あそび
- 19：00 延長保育終了

土曜日は15時までの保育があり、子育て支援地域活動として保護者の集い「おおきくな〜れ」を月2回程度開催している。母親同士の情報交換や交流の場として大切な活動となっている。



（園長：藤田貞子氏より取材）

豊橋中央幼稚園

所在地：440-0871 豊橋市新吉町6番地

☎0532-52-7805



経営主体は、学校法人龍拈寺学園である。2005年度、園児数は182名6クラス、教職員数は14名でスタートした。毎年3歳児を60名募集している。

創立は明治34年、引退住職の今井勘次郎氏が保育所として設立した。昭和になって幼稚園化され、「龍拈寺幼稚園」と名づけた。昭和60年3月31日より学校法人龍拈寺学園「豊橋中央幼稚園」と改称して現在に至る。

本園は、仏様の正しい教えや願いを基にして、知性と人間性豊かな幼児「明るい子、逞しい子、考える子」の育成に努め、次のような点を努力している。

- ・食後のブクブクうがい、歯磨きの習慣
- ・専任の体育講師の指導（縄跳び・ボール・リズム・跳び箱・鉄棒）
- ・専任の音楽講師の指導（楽しみながら歌唱・メロディオンなどの演奏）
- ・年中児・年長児には、座禅を取り入れ、心の指導に役立てる。
- ・小学校生活へスムーズに適應できるように、見通しを持った保育実践に努める。

保護者の中には、北海道や広島県などからのいわゆる転勤族も多く、卒園した子は20名ほどが新川小へ、ほかいろいろな小学校へ進学している。

（園長：白井友二氏より取材）

社会福祉法人向山保育園

所在地：440-0864 豊橋市向山庚申下1番地の1
☎0532-53-5381

経営主体は、社会福祉法人向山保育園。

2005年度、園児数は100名を越え、職員24名で保育にあたる。

昭和25年、初代園長河野琢州は、戦地より復員し、これからの世代を担う子どもたちのために何かできることはないかと考え、国から資材を払い下げ、自ら金槌を持ち、保育園をつくった。2代目園長鈴木素子は、父の遺志を受け継いだ。

向山保育園にある石碑には、「心も体もすこやかに」とあり、理想像として設立当初から願いを込めて建てられている。年齢にあった保育、適時保育を行い、人として生きていく上で大切なこと、人の目を見て話をする、聞くこと、挨拶・返事をする、立腰（背筋を伸ばし、立腰を立てる）教育を行っている。[知・斉・情操]の3本柱を立て、子どもの発達段階に応じた適時保育（教育と養護）、適切な言語教育、運動機能の向上、情操教育を行い、保育を進めている。



(園長：鈴木素子氏記)

(4) 中学校**豊橋市立中部中学校**

所在地：440-0813 豊橋市舟原町154番地
☎0532-54-8108



経営主体は豊橋市である。2005年度、生徒数は722名、教職員数は43名でスタートした。

本校は、昭和22年に施行された新学制（6・3制）により豊橋市立中部第一中学校として開校した。校区は、ほぼ現在の通りであった。生徒数は、戦後のベビーブーム時をピークに大きく変動している。ここしばらくは700名前後で推移している。ピーク時の昭和37年度には2,500名余の生徒が在籍し、豊橋一のマンモス校を誇った。

本校区は、4つの小学校区（新川小・松山小・向山小・つつじが丘小）より成るが、つつじが丘小学校からは半分ほどが中部中へ、半分は東部中学校へ進学している。

伝統的に運動部活動が盛んで、陸上競技部、バレーボール部、野球部などが県大会優勝や全国大会出場など輝かしい成績を残している。最近では、平成13年度の野球部全国大会ベスト8進出をはじめ、弓道部、ソフトボール部などが県レベルで活躍している。生徒会活動では、「自由と責任」を合言葉に生徒の主体的積極的な活動が伝統となっている。全校生徒が一丸となって創り上げる学校祭、学級全員が心をつにして歌う合唱コンクールは保護者からも高い評価を得ている。

(教頭：鳥山房夫氏より取材)

(5) 昔あった保育園と学校

前田保育園 (1931~1962) 昭和6年5月、市内3番目の保育園として、豊橋共存協会が東田町字舟原(現舟原町)に設立した。定員100名で園長以下保母3名。当初、前田共存園と名乗ったが、昭和9年4月、方面事業助成会に経営移管され、名称も前田保育園に改称された。昭和20年6月の豊橋大空襲の後、集団赤痢が発生し、新川小学校が臨時病院となったため、しばらくの間、舟原集会所とともに臨時の教室として使用された。

昭和32年、社会福祉協議会に経営移管され、昭和37年3月31日、惜しくも閉園となった。この間、新川校区の保育園として、地元で多数の卒園生を送り出している。

豊橋高等小学校 (1881~1947) 明治14年10月2日、上等小学豊橋学校として、八町の旧藩校跡(現公会堂の所在地)に創設された。当時は、下等小学校(6才~9才の4年間)が義務教育で、ここを卒業した後、大部分の人は、上等小学校(10才~13才の4年間)に進学した。

明治40年3月1日、豊橋市制に伴い、豊橋市八町高等小学校と改称された。

明治40年4月1日、義務教育が、4年から6年になったため、高等小学校の修業年限は、4年から2年に変更された。

当時、市内の尋常小学校(東田、八町、松

葉、新川、松山、狭間)の卒業生は、八町高等小学校に通学していた。

大正13年9月2日、児童数の増加により八町の校舎が手狭になったため、当時、まだまわりは田んぼばかりで何もなかった東田町字舟原(現中部中学校の所在地)に移転し、名称も豊橋市立豊橋高等小学校と改称された。この時、牟呂用水より北の地域から通ってくる生徒たちのために、舟原橋が架けられた。

昭和2年4月1日、豊橋市立女子商業専修学校が併設された。

また、昭和16年4月、豊橋国民学校単科高等科設置校と改称された。

そして、豊橋国民学校は、昭和22年3月31日で廃校となった。

明治37年7月から豊橋高等小学校機関誌「木陰のくさ」(月刊)が発行され、その一部は、豊橋中央図書館に所蔵されている。



校門



豊橋高等小学校

2 史跡、文化財、祭り

(1) 指定文化財（県・市）と記念碑

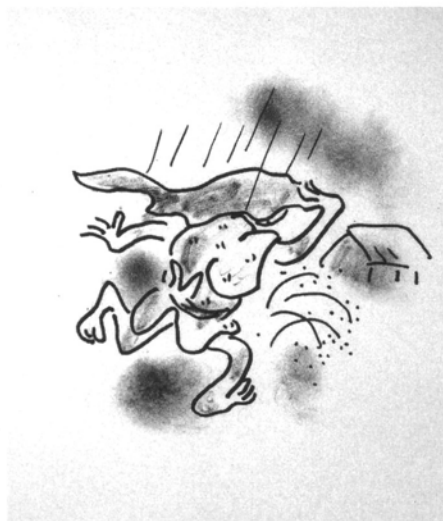
西光寺（曹洞宗 大手町）

- ・11月の酉の市で有名。年二回か三回開かれる。商売繁盛をかきこむように熊手の縁起ものを買う姿が夜遅くまで続く。
- ・境内には、芭蕉の句碑がある。戦前のものは戦災にあって破損、句碑の字が読めなくなった。戦後、平成11年に再建された。

[ぬれて行く 人もをかしや 雨の萩]
(泊船集 かが小松にて)

芭蕉が直接訪れたという事実はないが、ユーモアあふれる姿が連想され、ほっとする。

(句については、鈴木源一郎著 文学碑より)



やすみくまのしや いざなぎのみこと 安海熊野社—祭神—伊弉諾命 魚町

1136年、快円法師が建立、当初は、札木にあったが1590年吉田城拡張のため現在地に移転した。元禄年間（1688年～1704年）に魚売買を独占した。魚市場のはじまり。

- ・特筆すべきこと

能・狂言の面と装束（県指定文化財）

吉田藩主大河内家が所有していたが、明治5年に魚町の有志が譲り受けた。



能面・狂言面…93点

内訳…67面松平家より。その内6面は、昭和17年に文部省の重要美術品に指定された。（今は県の指定文化財、詳細は図録を参照のこと）
社宝の阿弥陀三尊は目下調査中。

神宮寺（天台宗）魚町（市電の札木町下車西）

1596年建立。本尊 大日如来。

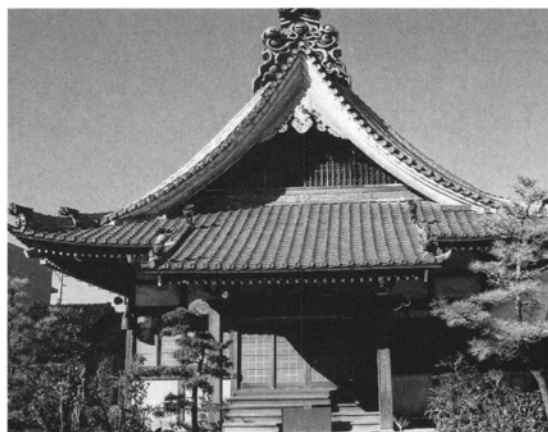
大日如来の像は、胎藏界で像高91cm。鎌倉末期ないしは室町初期の作。

- ・本堂 昭和40年に再建。
- ・地藏堂 昭和60年落慶。

地藏堂の本尊は、身代わり地藏ともいわれている。（民話は別掲、昔話の項参照）

- ・吉田七福神めぐりの一つで神宮寺には恵比寿天（えびすてん）が、地藏堂の右側に安置されている。

地藏信仰は、根強く江戸時代から今日まで参詣者が多く、線香が絶えない。



向弘苑 真言宗 明治38年4月10日、苑主阿辺弘氏の祖父阿辺市太郎と父阿辺藩岳の努力で創建。

向山の弘法さんと市民に親しまれ、境内には子授け地藏尊も安置されている。番号と略図を確認して参拝するとよい。

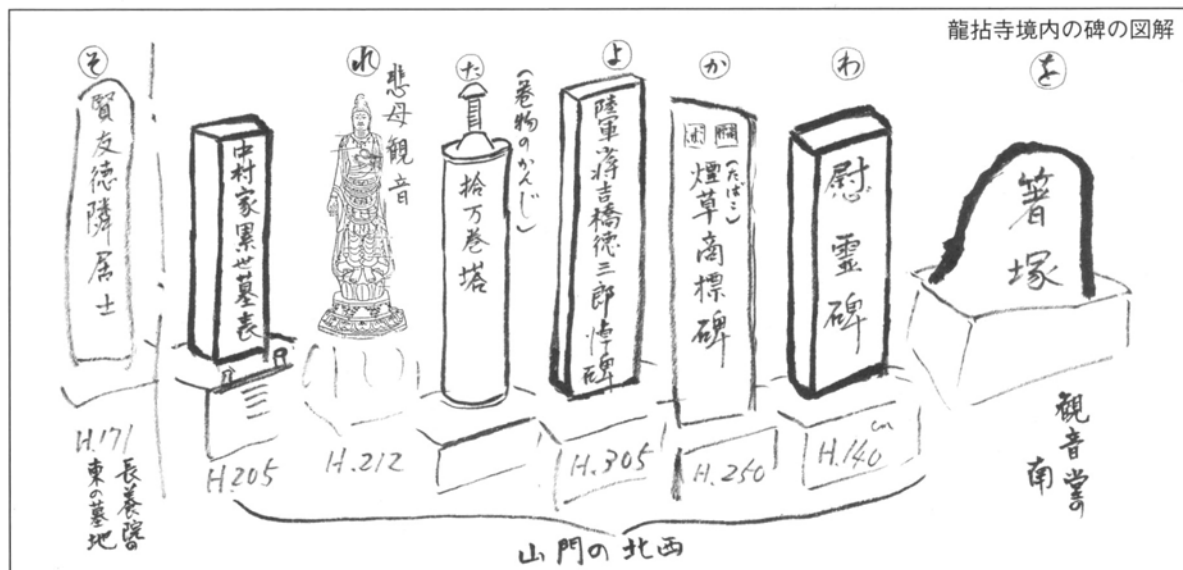
- ①弘法大師堂（室内） 本尊 弘法大師像
- ②西国33か所霊場（室内） 石仏33体
（プラス手引き観音）
- ③十二支守本尊堂

阿弥陀如来 い	ね 聖観音菩薩
阿弥陀如来いぬ	うし 虚空蔵菩薩
不動明王とり	とら 虚空蔵菩薩
さる 大白如来	う 文殊菩薩
ひつじ 大白如来	たつ 普賢菩薩
うま 梵堂菩薩	み 普賢菩薩
即身閣	

- ④四国88か所（石仏）霊場（路地）
- ⑤水掛不動明王と二大童子（石仏立像）
制吒迦童子 不動明王 矜羯羅童子（路地）
- ⑥六地藏一対
- ⑦子授け地藏 安産祈願



聖蹟の説明
 昭和2年11月21日
 昭和天皇、豊橋を御展望
 された記念碑
 （陸軍大演習御統監の時）



龍拈寺 曹洞宗 永正3年(1506年)今橋城主牧野古白が戦死してここに葬られた。その後、大永元年(1521年)牧野信成が、亡父古白の追善供養のため龍拈寺を建てたと伝えられている。なお①日進院、②長養院、③悟慶院は、かつて龍拈寺の塔頭(禅宗で宗祖や高僧の徳をしたって、その卒塔婆のそばに建てた僧坊)であったが、平成12年にそれぞれ独立した。

龍拈寺の寺宝(市の指定文化財、非公開)

- ・華陽夫人画像 徳川家康の祖母 酒井忠次が寄進
- ・牧野古白母堂画像

建造物 参拝

場所 植物

- ①龍拈寺山門 市の指定文化財
- ③観音堂(昭和25年建立)本尊 聖観音
- ④クスノキ(豊橋で最も太いクスノキ) 幹周640cm高さ21.4m(豊橋の巨木100選2005版より)

みどころ

- ②観世左近太夫(能楽)の墓
- ⑤牧野古白の墓
- ⑦庚申さま
- ⑧龍拈寺住職代々の墓
- ⑨本居おおひら大平の墓(1756~1883)本居宣長の養子
- ⑩箸塚(平成7年8月4日)箸の業者が建之

- ⑪慰霊碑(昭和23年8月7日)建之 48柱英霊(裏面に殉職者氏名あり) 豊川海軍工廠にて(昭和20年8月7日散葉せり)

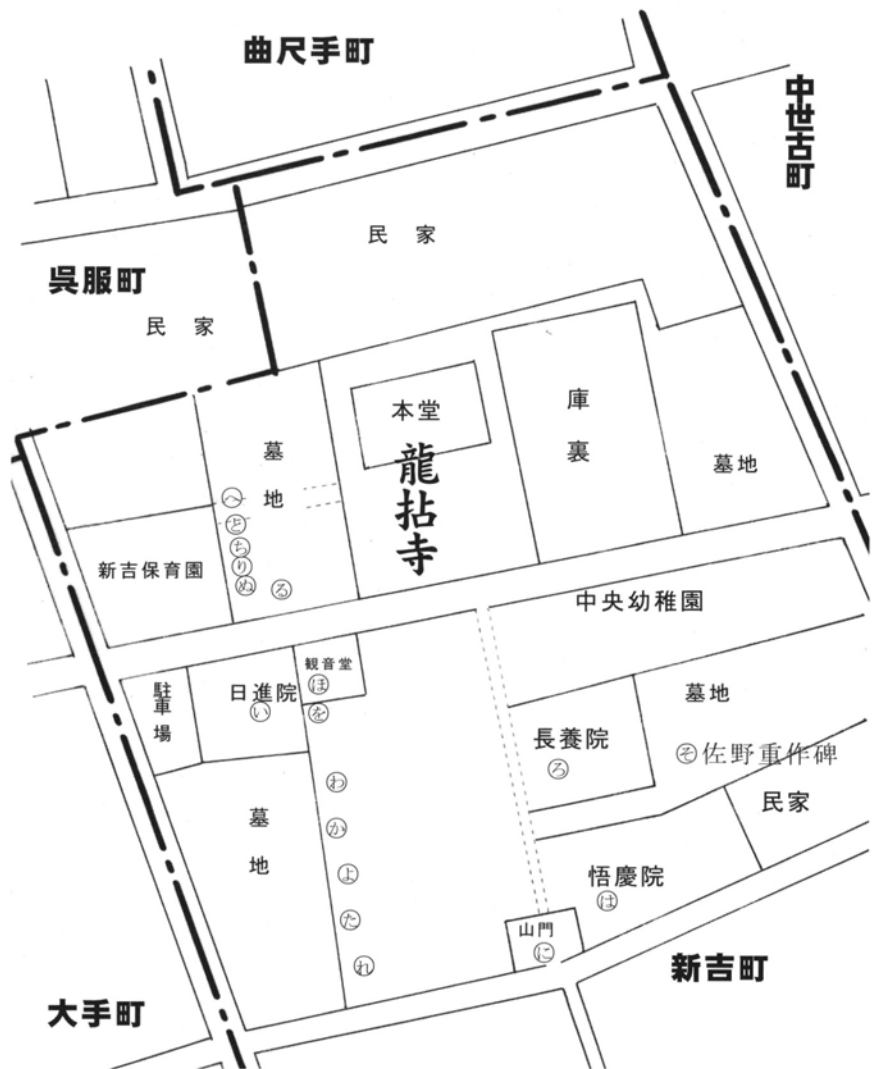
⑫煙草商標之記

明治18年~明治38年商標を残すため

- ⑬陸軍少将吉橋徳三郎 追悼碑
- ⑭摩訶般若波羅密多經 拾万巻塔
- ⑮悲母観音像 女子学徒殉難之碑

(昭和20年8月7日学徒動員中)

豊橋高女、愛知実習高女 計26名殉死場所 中島航空機半田製作所



(2) 新川校区のお祭り

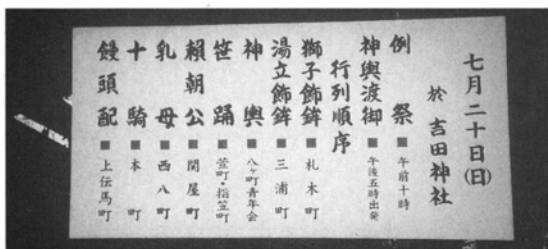
校区内には、地区別に祭事があり、春夏秋冬、どこかでお祭りを見ることができる。春は5月の魚町安海熊野社祭礼、夏は7月の札木町祇園祭、秋は10月の大手神明社例大祭、東田神明宮例大祭ゆかりの舟原、前田、小畷町による町内祭り、冬は2月の鬼まつりである。

祇園祭 新川校区では札木町のみが花火の打ち上げを行なっているが、祭礼行事「御輿渡御」では、札木町が獅子飾鉾、魚町が鼻高面の役を担っている。

札木町の「団子」の印が生まれたのは、京都の祇園街・先斗町^{ぼんとうちょう}の印から発想したものだとのこと。祇園祭には、吉田藩主が関係していたので、おそらく藩主が考えて、各町内へそれぞれ祭礼の行事をうまくあてはめていたのであろう。だから、8ヵ町のうち、いくぶん気風のおとなしいところへ花火を割り当て、威勢のよい魚町へは花火をあてがわずに御輿を担がせるなど、町内の気風を考慮したものだと思われる。

札木町の大筒は「いない筒」といい、若者はふんどし一つの浴衣で片肌ぬぎになり、火がシューシュー噴き出す大筒を担ぎヤットーヤットーと、札木角から今の電話局あたりまでねった。

以前の祇園祭は旧暦の6月13、14、15日であったが、今は7月の第3金・土・日曜日である。昔は各町とも6月1日から祭典の終了まで休業し、各家庭とも別火で食事をし、毎朝水ごりで身体を清めた。



大手神明社(野口神明社) 同社の創立は古く天正11年(1583)9月、明治4年村社に列格、明治40年10月指定村社になったが、社殿は昭和20年6月20日未明の戦火によって消失した。消失前の境内は、大手通りに沿っていたが、その後の市区画整理により縮小され、大手通りより東方の現在地に移された。

かつては、野口神明社と呼ばれ、氏子区域は裏八町より牟呂用水付近まで及んでいたが、現在は大手町、神明町、新吉町の3町になっている。例祭日は旧暦9月15日その後10月18日になったが、平成に入り10月の第2日曜日が例祭日となっている。

祭事は「手水の儀」にはじまり神楽「乙女の舞」を児童が舞い、奉納している。

宮司 匹田年彦氏 談



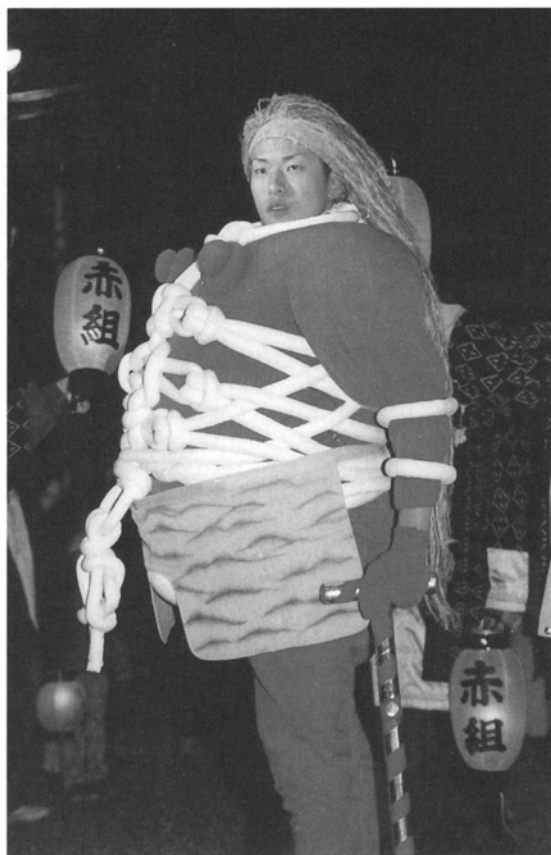
新吉町の山車

東田神明宮例祭 舟原、前田、前田二丁目、小畷の各町内は昭和7年以前は「東田町」であったので、同神明宮の氏子として祭礼を奉納していた。しかし、小畷町は昭和15年頃、前田町、前田二丁目は昭和48年頃、東田神明宮より分祠した。舟原町は今も東田神明宮の氏子として、平成12年の例祭日には神楽「浦安の舞い」を奉納している。

同神明宮は平成17年より10月第2日曜日を例祭日と決めている。

鬼まつり 国の重要無形民俗文化財に指定されている「鬼まつり」は、赤鬼と天狗のからかいが有名である。その赤鬼の神役を司っているのが中世古町である。その神役名簿は江戸後期から記載されており、町の誇りが感じられる。札木町では明治15年から「子鬼」が社参するようになった。呉服町では五十鈴神楽を奉納している。

例祭は元来陰暦の正月13日、14日の両日に行われてきたが、明治時代には2月14日、と15日に、昭和43年からは2月10日と11日に変わった。



神明社祭礼（中世古神事）

安海熊野社の祭礼 明治の頃より当神社は通称魚町の権現様と呼ばれてきた。例祭は、従来毎年7月7日、8日の両日に行われてきた。当日は町内所々の見通し台に御神燈を飾り、賑やかに祭儀が奉仕される。

もともと当神社の祭りは夏祭りの先がけて、町民は梅雨が明けるのを待ちかねて、夕涼みを兼ねて年々参拝したのであった。

明治17年安海熊野社内に能楽殿を新築、その後明治34年に改築し、名実共に立派な能楽殿となった。能楽殿では優雅な謡曲が夜空に響き渡り、やがて能楽と狂言が、あるいは静々と或いは面白く演じられた。町民は、夏の夜が明けるのを忘れて楽しんだ。この他、祭りには、子供の御輿と獅子頭が氏子町内を練り歩き、祭りを盛り上げるようになった。

大祭は昭和42年以降5月4・5日の両日に改められた。



魚町豊栄舞（昭和34年7月）



魚町能楽殿遷官（放下僧）
明治44年8月

3 人物、今昔ばなし

(1) 人物

浅野 勝人

昭和13年4月19日生まれる。

本籍、豊橋市舟原町。

新川小学校、中部中学校、豊橋東高校、早稲田大学第一政経学部卒。

NHK政治記者、総理大臣官邸キャップ、解説委員、ニュース解説キャスター。

衆議院議員として愛知第5区、愛知第14区から当選。自由民主党所属。防衛政務次官。現在参議院議員。

安藤政次郎 (1855~1930)

出身、吉田紺屋町(現、豊橋市大手町)

安藤動物園の創始者。明治32年駅前を開園。明治45年、花田町守下へ移転。昭和6年、市へ移譲。

昭和5年7月18日、没。

大津 美子

昭和13年1月12日生まれる。

現住所、東京都目黒区駒場。豊橋市神明町の料理店「鳥善」店主・大津昭司氏の姉。

歌手として、「ここに幸あり」が大ヒット。今でもひろく歌いつがれ、海外でも愛唱されている。

現在、「豊橋ふるさと大使」。

岡田 哲児 (1923~1994)

大正12年8月15日生まれる。中世古町出身、新川小学校、昭和11年卒。村田敬次郎氏と同期。国鉄勤務。昭和42年、同47年衆議院議員当選。社会党所属。現、県会議員の柏熊光代氏は長女。

平成6年5月1日、没。

神谷 幸吉 (1872~1914)

呉服町51の大谷屋画材店の神谷すばる氏の祖父。

明治・大正期の政治家、大隈重信(総理

大臣、早稲田大学の創立者、南極探検隊の後援会長)の秘書となる。

明治43年、白瀬中尉の南極探検隊の会計事務長となって探検事業をささえた。

大正3年12月8日、没。

金子健四郎 (1816~1864)

出身地、吉田魚町(現、豊橋市魚町)

幕末期、田原藩の渡辺華山と親交を結ぶ。剣客家(神道無念流)。水戸藩に仕え剣術を指南。攘夷運動に奔走。桜田門外の変の水戸浪士の多くは健四郎の門人であった。

元治元年(1864)4月10日京都において病死。

河合徳次郎 (1897~1964)

明治30年12月11日、豊橋清水町(現、豊橋市魚町)で生まれる。

講道館三船久蔵について柔道を学ぶ。大正15年から豊橋商業校、豊橋第二中学校、警察署などの柔道教官を務め、同9年整骨院を開業。

昭和4年豊橋一心館館長。同27年講道館柔道八段。昭和26年から同38年まで豊橋市市会議員を3期務めた。

昭和39年12月26日、没。

笹野又起子

大正10年3月13日生まれる。本籍、豊橋市花園町。現住所、豊橋市舟原町。

豊橋市立高等女学校3年修了。日本で初めてバレエを教えた白系ロシア人のエリアナ・パヴロバに師事、東京松竹歌劇団に入団、昭和18年に幹部となる。戦後、豊橋にバレエ教室を開設、白ロシア共和国ミンスク国立バレエ学校の提携校となる。現、笹野バレエ会長。

佐藤 一平 (1903~1981)

明治36年11月30日、魚町に生まれる。

県立第四中学校(現、時習館高校)、弘前高等学校、京都帝国大学経済学部卒。

愛知県の労働運動、住民運動の草分け的存在。戦後の昭和21年、弁護士として、豊橋市内で法律事務所を開設。

昭和30年、革新統一候補として、愛知県知事選に、豊橋市長選に立候補。昭和43年豊橋労働学校を創立した。

昭和56年1月18日、没。

杉田有窓子 (1907~1985)

本名、英一郎。明治40年、魚町の酒類販売商「杉八」に生まれる。青山学院大学神学科卒。

戦後まもなく、昭和23年「国際主義の確立、伝統文化の尊重、愛国精神の発揚」を社是に掲げて、豊橋での日刊紙、東三新聞を発行。現在の東日新聞にひきつがれている。他に、評論、随筆、詩集を執筆、刊行。

豊橋公園に「中村道太碑」(昭和37年)、高師緑地公園に「鈴木悦・田村俊子文学碑」(昭和60年)を建立して、郷土の先覚者の顕彰につくした。

昭和60年10月24日、没。

田中 田新

初代 (1824~1903)

2代 (1865~1938)

出身、魚町。進歩的な考え方と行動力を持ち、石油ランプや灯油等の開化ものを商う。

ロシア正教の洗礼を受け、豊橋ハリストス正教会の聖堂建設に尽力した。(大正2年)初代は、明治36年8月13日、没。

2代は、昭和13年5月20日、没。

中村 直吉 (1865~1932)

出身、豊橋市呉服町。慶応元年6月25日生まれる。

生来の旅行好きで、自ら「旅行狂」あるいは「風船玉」と称し、無一文で五大州を踏破した旅行家。

昭和7年7月27日、没。

野口 品二 (1899~1973)

明治32年5月8日、豊橋町神明(現、豊橋市神明町)に生まれる。

新川尋常小学校、成章中学校(現、成章高校)卒。大正10年東洋大学在学中に河合陸郎、福沢卯介、浅井秀雄らと社会主義思想の黒墓土社(クロボト社)を結成。

昭和6年、豊橋体育協会を結成して常務理事、翌7年、豊橋市連合青年団指導主事となる。昭和23年東三新聞囑託となり、「豊橋子供会野球を楽しむ会」をはじめめる。昭和28年、戦後総代会の初代会長。

昭和48年7月11日、没。

早川 勝

昭和15年12月21日生まれる。

新川小学校、中部中学校、時習館高校、愛知大学法経部経済学科、立教大学院経済研究科卒。

衆議院議員(1986~1996)連続3期当選、この間に社会党政策審議会会長、大蔵政務次官、村山総理大臣補佐、現在、第31代豊橋市長(1996~)3期目。

村田敬次郎 (1924~2003)

大正13年生まれる。

新川小学校、豊橋中学校(現、時習館高校)、第三高等学校、京都大学法学部卒業。

自治庁、愛知県建築部長を経て昭和44年衆議院議員に当選。平成13年引退するまで連続10回当選。

その間、通商産業大臣(昭和59年)・自治大臣・国家公安委員長(平成4年)、自民党政調会長(平成元年)・国会等の移転に関する特別委員長(平成4年)・自由民主党愛知県連最高顧問。

著書に、「メガロポリスへの挑戦」「国土をデザインする」等。

平成15年4月2日、没。

(2) 今昔ばなし

狐塚 魚町の文具店、弘文堂（鈴木家）の裏庭の一隅に「狐塚」が祀られている。

神明町辺りがまだ未開の原野であったころ、このあたりに棲んでいた老狐が、あるとき野犬に襲われて殺されてしまった。それを哀れんで里人が塚を造って葬った。その後、この辺りに移り住んだ医師の加藤玄順が、その塚の上に碑を建てたのが延享3年（1746）であった。

文化元年（1804）、同地に鈴木氏が弘文堂を開業して、この塚を引き継いで供養した。それは現在の神明公園の噴水池あたりであった。

ところが、昭和20年の空襲で鈴木家は被災、戦後の都市区画整理で現在の魚町に移り、「狐塚」も同じくこの地に移転した。



塚の傍らに一本の白梅と、俳人・柳居の「梅白し 蔵主の塚に 掃除栄え」の句碑が立ち、毎年2月の初午の日には、信者が集まって供養の祭りが行われている。

願掛け地蔵 前記、魚町の「狐塚」のすぐ近くに天台宗比叡山延暦寺の末寺である神宮寺がある。その境内の小堂に「願掛け地蔵」が祀られている。安政元年（1854）の安政の大地震が、この地にも襲った。たまたま境内の寺子屋にいた子どもたちの内、魚町の十一屋の9才になる娘「いさ」が逃げ遅れ、倒れてきた鐘楼堂の下敷きになってしまった。しかし、不思議なことに「いさ」は、無傷で助かった。

しばらくして、十一屋夫婦の夢枕に地蔵尊が立って、「娘の身代わりとなって娘を守っ

たが、首が取れてしまったので、早くもとに直してほしい。」とお告げがあった。急いで鐘楼堂を取り除いてみると、お告げの通り、地蔵尊の首が取れていた。十一屋はさっそくその首をつなぎ、地蔵尊供養の法要を行った。

以後、「身代わり地蔵」「延命地蔵」「願掛け地蔵」「子育て地蔵」と呼ばれ参詣者が絶えない。毎年、11月24日には大祭が営まれる。

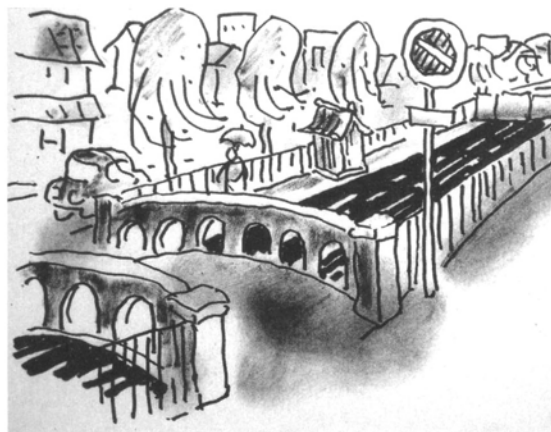


蛭観音 牟呂用

水にかかる新中世古橋と談合橋の中間に、用水路にはみ出した小さな祠がある。そこに祀られているのが、蛭観音の石仏。承応3年（1654）吉田藩は、向山に大池を作り、その水を吉田城の外堀に引くことに成功した。

この水路の途中、下町辺りから分かれて、談合町、中世古町、市南町の田畑へ灌漑する小流があった。その小川に蛭が多くいたので、蛭川（ひーる川）と呼ぶようになった。

明治の中ごろ、牟呂用水が開通したので、この蛭川の役目は終わり、なくなってしまった。その後、用水沿いに子供の安泰を願って観音堂を建て、蛭川にちなんで蛭観音と名付けて、近くの住民が供養している。



女神の像 戦後のヤミ市の跡地に作られた神明公園に、昭和27年7月公園近くの山安、若松園の店主らが、彫刻家の河内山賢祐氏に依頼して女神像を建立した。それは、戦災復興のシンボルとして「平和の女神像」と呼ばれ親しまれた。

高さ約1.5mのセメント製、差し出した右手の上にリンゴをのせ、微笑みかけている。ところが、長年の風雨でリンゴが崩れ、噴水も出なくなり、平成8年12月、公園改装工事と共に撤去されてしまった。

一時は、そのまま消え去る運命の女神が、「女神像の復元を考える会」(小嶋和四郎代表)によって資金が募られ、修復され、平成14年7月、6年ぶりに元の公園内に復帰することができた。



春には、まわりに白木蓮の花が開く。

豊橋道路元標 大正11年、各市町村のほぼ中心にあたる地点に道路元標が設置された。東京の元標は、日本橋のたもとにある。

豊橋のそれは、呉服・札木通り(旧東海道)と大手通りが交差する北西角、電柱の足元にある。高さ47cm、幅25cm四方の御影石。「標」の一字が地中にかくれている。昭和27年、新道路法によ



って、元標のお役は御免となり、今では「豊橋のおへそ」となって残っている。

不許葷酒入山門 新吉町の龍拈寺山門の右手に、高さ2m、幅25cmの石碑が建っている。彫りも深く「葷酒の山門に入るを許さず」の文字が刻まれている。

「葷」とは、ニンニクなどにおいが強く精がつくという野菜のこと。酒とともに、禅寺での修行のさまたげになると、寺内への持ち込みをかたく禁じた指標。往時の戒律のきびしさを物語る。

今様に解釈すれば、「酒の車中に入るを許さず」という交通安全標語にもなるのでは。



ラバトリー 札木通りの中京銀行裏手の一角(昔の板新道)に、一坪たらずの鉄筋コンクリート造りの公衆トイレがあった。

太平洋戦争末期の昭和20年6月20日夜半の空襲で、豊橋の市街は一面の焦土。焼け残ったのは、額ビル(現在のカリオンビル)と銀行と土蔵であった。

その中に、小さくてもポツンと立ち残っていたのがこのト

イレ。平成2年に建て替える。グリーン三角屋根に、風見鶏がまわる。色ガラスの出窓。軒先に洋燈。入口に横文字で「Lavatory」。誰かが喫茶店とまちがえたとか。



参 考 文 献

- | | | | |
|---|---|---|--|
| 豊橋の町名の変遷
豊橋の町名の変遷 (補遺)
向山と瓦町の歴史
30年のあゆみ
保育事業の年輪
豊川用水史
豊橋市勢要覧
東三新聞縮刷版
50年前の豊橋市
木陰のくさ
東三知名録
魚町物語り
とよはしの歴史
昔ばなし
竜巻の記録
向山30年のあゆみ
参陽商工便覧
豊橋市史
豊橋市立新川小学校
創立百周年記念誌
新川小学校85年の歩み
安海熊野宮と能楽
「a(あ)！豊橋」
豊橋空襲体験記
こんな本がほしかった まちづくり
ワークショップマニアル
豊橋市戦災復興誌
愛知の区画整理 | 吉川利明
吉川利明
吉川利明
村松幹之編纂
豊橋市保育協会
豊川用水研究会
豊橋市役所
東海日々新聞社
稲葉治穂
豊橋高等小学校
東日新聞
杉田有窓子
豊橋市
長坂理一郎
市消防本部防災対策室
豊橋市立向山小学校編
岡崎地方史研究会
豊橋市史編集委員会

豊橋市立新川小学校
豊橋市立新川小学校
平石基次・平石正彦
豊橋市教育委員会
豊橋空襲を語りつぐ会

豊橋市戦災復興誌編集委員会
30周年記念誌編集委員会 | 郷土新川風土記
とよはしの子ども会40年のあゆみ
創立二十年誌
豊橋下水道50年史
体育35年の歩み
中世古神事係行事
豊橋市土地宝典
前田耕地整理組合確定図
市制100周年記念豊橋百科事典
昭和20年1月頃の魚町家並
ふるさとの思い出写真集・豊橋
日本地名大辞典・愛知県
豊橋市の商業 (商業統計)
豊橋市の工業 (工業統計)
みんなの豊橋
郷土豊橋を築いた先覚者たち
ふるさと新川
能狂言 豊橋魚町の面と装束
豊橋いまむかし
豊橋の史跡と文化財
広報とよはし
郷土新川風土記
郷土の歴史探訪・ウォッチング豊橋
地方新聞・新潮報
がんばろうね
豊橋が輝くとき
豊橋信用金庫75年史 | 新川校区老人クラブ連合会
40周年記念事業実行委員会
吉田町万歩会記念誌編集委員会
豊橋下水道50年史編集委員会
体育委員35周年記念実行委員会
早川精一、柴本清高
井田耕司
丸地和夫所蔵
豊橋市
中根平之助
鈴木源一郎
角川書店
豊橋市
豊橋市
市文化課
豊橋市教育委員会
新川校区社教
市美術博物館
名古屋郷土出版社
市教育委員会
豊橋市
山田誠二
山田誠二

市企画部企画課
豊橋信用金庫 |
|---|---|---|--|

編 集 後 記

この編集に携わって、いろいろ新しい発見がありました。しかし、分からないことの方が多かったというのが実感です。ここに記したことがらは新川校区のほんの一面にしかなしません。多くの重要なことがらが抜け落ちていると思います。校区内の皆様方にご一読いただき、この校区のあゆみや現状に目を向けるきっかけにさせていただければ幸いです。

新川校区史編集実行委員

協力者

豊橋市	市立図書館	区画整理課	公園緑地課	街路課	行政課
石河 真一	磯田 一郎	井上 良馨	大林 正和	小木曾秀正	神谷すばる
亀井 猶治	坂上 隆三	柴田新市郎	白井 友二	鈴木 素子	高橋とく子
鳥山 房夫	永井元一郎	中川 清一	中田 孝	中根平之助	中村 安子
原 マスエ	原田 廣	伴 準平	匹田 年彦	藤田 貞子	村田 巽
山田 誠二					

写真提供

安海熊野社 倉橋源司 弘文堂 清水時計店 中世古町 山田 誠二

編集委員

委員長	小林 信昭				
副委員長	原瀬 強	野口 志行	小川 幸男		
委員	今泉 正弘	岡本 和未	桑山 真一	清水 信子	菅沼 万吉 畑野 一彦
サポーター	石原 康次	小木曾充彦			

※ 五十音順 敬称略

校区のあゆみ 新川

平成18年12月25日発行

編集 新川校区総代会
新川校区史編集委員会

発行 豊橋市総代会

印刷 株式会社 きょうせい

R100

紙製率100%再生紙を使用しています

PRINTED WITH
SOY INK
Member of American Soybean Association



2006年
市制100周年
100th Anniversary Toyohashi City

つながり ひろがる 未来 豊橋